

特集：市民の力 — 博物館活動のひろがり —

今の世の中、ボランティアばやりである。博物館の世界でも、ボランティアの活躍がよく話題になっている。内容は展示解説・資料調査・体験学習などさまざまであるが、確実に地域の博物館を動かす力のひとつになりつつあるのではなかろうか。

ボランティア活動の目的のひとつは、「市民の力」を借りて博物館活動の再検討・再編成・活性化を図っていくことだと思う。昨今の厳しい社会情勢のなかでこそ、こうした活動を通して、地域における博物館の存在意義をアピールしていきたいと考える。

多摩地域における博物館でも、早いうちからボランティア活動に取り組んでいるところ、ようやくスタートさせたところ、これからの導入を検討しているところなど、さまざまである。しかし、これからは避けて通れない課題だと考えている博物館が少なくない。もちろん各館の規模や設立主旨や運営方針はまちまちであるし、ボランティアの受け入れは考えないという館もひとつの見識である。要は、こうした課題と関わりながら、それぞれの博物館の方向性や、地域での博物館のあり方を考えていく必要があるのではないかとということである。

本誌では、以上のような状況を踏まえ、多摩地域の博物館におけるボランティア活動の状況を把握すべく特集を組むことにした。さいわい、多くの館からこの課題に真摯に取り組んでいる様子がわかる情報を得ることができたと思う。各館に対するアンケートによる基本的なデータも集めることができ、博物館活性化のひとつのステップになることを期待したい。

(編集委員会)



東村山ふるさと歴史館



八王子市郷土資料館



府中市郷土の森博物館



くにたち郷土文化館



バルテノン多摩

遺跡公園づくりを通じたコミュニケーション

- 「しもやけべ遺跡公園を育てる会」の取り組み -

東村山ふるさと歴史館

遺跡の保存と活用 市内の「下宅部遺跡」は、都営住宅建替え工事に伴う本格的な発掘調査により、全国的にみても重要な遺跡であることが判明しました。しかし調査終了後には遺跡は開発により破壊されてしまいます。そこで、各方面からの要望により、下宅部遺跡の中でも最も重要と考えられる地域約3000㎡が「埋没保存」という、地下に当時の遺跡が埋まったままの状態を守り残すこととなりました。そこを「遺跡公園」として発掘調査成果の市民への還元、生涯学習、コミュニケーションの場として整備することが発案されました。そこで地域に愛され、活用される公園を目指すため、付近住民をはじめとした市民に公園整備の計画段階から広く参加してもらうことになりました。

公園づくりワークショップ 下宅部遺跡の公園整備を検討するために平成12年10月から平成13年10月までの1年間、計12回の市民参加型ワークショップを開催しました。歴史館が事務局という形で会の企画、進行、報告、連絡などを担当し、それに周辺住民や考古学や遺跡に関心のある方、自然保護団体など市内外を問わず広く参加者が集い、意見交換や作業を一緒に行うといった形式で行われました。これには、保存にいたる経緯から、公園の面積ではなく内容を一緒に検討していきたいという歴史館や遺跡調査団側の意向と、もっと遺跡の保存面積を増やした上で検討をしたいという熱意ある市民側の要望といったスタートラインの相違が、構図として「行政（歴史館）」対「市民」という形態の「条件ありきのワークショップ」になってしまい、市民主体の活動にならなかったといった反省点があります。それでもワークショップは、それぞれの立場を尊重しながら、学習段階（遺跡の概要や現地の見学、他の遺跡公園の見学など）、構想段階（遺跡公園のイメージの検討）、計画段階（具体的な公園整備内容の検討）と回を重ね、毎回「みんなでつくろう！しもやけべ遺跡公園」というニュースも発行し、活動を続けた結果、「成長する公園」をキーワードとした基本計画書を作成することができました。

育てる会の取り組み ワークショップを受けて、平成14年度から、「しもやけべ遺跡公園を育てる会」として遺跡公園を育て、活用していく活動を開始しました。育てる会は、遺跡公園は完成がなく、成長し、常に変化していくものだというコンセプトのもとに、学校や地域、その他の団体と一緒に活動していける場として、公園のハード・ソフト面を検討するといった、まさに

公園の里親となるような取り組みを月1回のペースで行っています。会の運営も育てる会参加者からなる世話人により、会の進行や方針を決めていく形態が進められ、また各種研修会なども企画・実施しており、会自体も成長することを目指しています。現在は平成15年12月のオープンを目指して、公園設計の業者と公園整備の基本設計を検討しています。

今後の展望 今までの博物館と市民との関係が発信・受信という一方向からのコミュニケーション関係であったのに対し、これからの博物館では課題の共有や解決の模索、企画や運営といったプロセスを重視した、双方向のコミュニケーション関係が求められています。いうまでもなく、ボランティア活動もそれぞれ対等な立場において、お互いに補完しあえる双方向的な関係でなければ、継続的、創造的な関係にはなりません。この遺跡公園づくりが、共通の目標のもと、市民の主体的な活動を通じて、自己実現の場、あるいは市民同士や地域と結びつける新しいコミュニケーションの場として成長していければと思います。最後に博物館を通じた新しいコミュニケーションを目指した取り組みとして、平成15年4月から、育てる会の活動を中心にした遺跡公園づくりの企画展を開催します。育てる会や小・中学生、各種団体、地元の商店などと一緒に、ポスターの作成や、展示企画から作成、展示ガイド、付随事業の共催、グッズの開発などを行い、見学者も巻き込んだ「展示を見るから創る」参加型の企画展を予定しています。

市民参加型の博物館を目指して

八王子市郷土資料館

八王子市郷土資料館では、現在ふたつのボランティア活動が行われています。ひとつは、当館の展示ガイド及びイベントや講座のお手伝いをしていただいている「八王子市郷土資料館ガイドボランティア」、もうひとつは、八王子市内の古文書の所在調査をしていただいている「古文書所在調査ボランティア」です。どちらも平成13年度から市民の方々の協力を得ながら当館の博物館活動の幅を広げていくために導入されました。それぞれの活動について紹介します。

「ガイドボランティア」が活躍中! 八王子市郷土資料館ガイドボランティア（以下、ガイドボランティアと称す）は、平成13年7月24日（火）から活動が開始されました。生涯学習社会の到来、市民参加型のまちづくり、お金をかけない市民サービスの向上等、様々な社会的要因や行政としての思惑もあるなかで、当館としては、「市民に対して『生涯学習の場』と『市民参

加の場」を提供し、当館の利用者サービスを向上させる」という趣旨によりガイドボランティアを導入しました。

ボランティアの募集 当館ではボランティア養成講座等を行っていませんので、ガイドボランティアを導入する趣旨や活動内容等を説明するための事前説明会の開催を市の広報で周知しました。事前説明会には41名の参加があり、実際にガイドボランティアとして応募されたのは32名でした。全員と面接したうえで、受け入れ態勢の問題等から、まずは14名に2日間の講習を受けていただき、活動が開始されました。その後、待機の15名が合流し、初年度は29名（3名は都合により辞退）の登録で活動を行いました。ガイドボランティアの登録は年度毎とし、今年度（平成14年度）は引き続き29名が更新されましたが、都合により辞退された方がいますので、現在は28名が活動されています。

活動内容 主な活動内容は、当館の展示ガイド及びイベントや講座の補助です。展示ガイドでは、毎日2～5人の方が活動されており、展示物の説明だけでなく、体験コーナーのはた織り機や八王子車人形等の操作の補助、事務室や閲覧室への来館者の案内等、幅広く活動されています。また、展示室では、来館者とガイドボランティアが談笑している光景を良く見かけます。来館者にとっては、展示から一方的に情報を得るのではなく、自身の感想や意見等が言えるので、ガイドボランティアは良き話相手であり、社会科学見学や総合的な学習の時間、宿題等で来館する子供達にとっては、良きアドバイザーとなっているようです。イベントや講座の補助では、職員の手が回らないところや準備、片付け等のお手伝いをしていただいています。

職員への影響 ガイドボランティアの活動をとおして、職員も良い勉強をさせていただいています。「自分達の活動により、来館された方が疑問に思ったことや調べたいことなどの要望を職員に伝えることができるので、来館者と職員の橋渡し役になっていると感じている」とのガイドボランティアの感想からもわかるように、今まで以上に来館者と職員との接点が増えました。また、ガイドボランティアや来館者からの要望や意見が数多く寄せられるので、展示の意図が上手く伝わっていないことを認識することや解説の間違い等を指摘されることがあり、冷や汗を流すこともあります。

定例会 当館のガイドボランティアには、展示ガイドのマニュアルはありません。それは前述の趣旨によりガイドボランティアが自ら学習した知識を展示ガイドに役立てていただきたいと考えたからです。また、それぞれの活動日がある程度固定化しているので、全体としての意見や要望を調整する機会がありません。そこで、八王子の歴史や文化を全体で学習したり、意見や要望を調整する機会として、毎月一回定例会を開催

しています。定例会の内容を一部挙げると、「遺跡(埋蔵文化財包蔵地)について」「遺跡発掘調査現場見学会」「特別展や企画展の解説」「文化財施設等の見学」「八王子車人形の構造や使い方について」等です。

自主的活動 展示ガイド及びイベントや講座の補助は、当館でお願いしている活動ですが、平成14年6月にガイドボランティアの有志による「新八王子 郷土かるたをつくろう会」が発足しました。この活動は、ガイドボランティア自身による初めての自主的活動です。近隣市町村の郷土かるたを購入したガイドボランティアが、「ガイドボランティア版郷土かるたを全員で作りたい」と呼びかけたのがきっかけでした。現在、つくろう会の活動は、毎月の定例会が終わったあとに行われ、都合がつかないときは、臨時会が開催されています。活動には職員もオブザーバーとして参加していますが、職員がほとんど口を挟む余地もなく、ガイドボランティア同士で白熱した議論を交わしています。当館では、ガイドボランティア版郷土かるたが、一日でも早く完成するよう支援し、また、新たな自主的活動が行われることを期待しています。

今後の展開と課題 当館では、ガイドボランティアに対して、交通費をはじめ、金銭の支給は一切行っていません。しかし、ガイドボランティアは、自分なりの「ガイドボランティア活動の楽しみ」を持って活動されています。当館としては、その「ガイドボランティア活動の楽しみ」を持ち続けられる活動であることが、ガイドボランティアの活動を継続する重要な要件の一つと考え、ガイドボランティアとコミュニケーションをはかりながら、活動を展開させていきたいと思えます。今後は、当館の展示ガイドだけではなく、当館が管理している文化財施設や史跡等のガイドへの展開等を考えており、ガイドボランティアの活動をとおして、多くの方々に八王子の歴史と文化に親しんでいただければ幸いです。



展示ガイド風景

「古文書調査ボランティア」への試み 八王子市郷土資料館の「古文書所在調査ボランティア」（以下、調査ボランティアと称す）が調査活動を開始して、平成15年1月で丸1年を迎えます。周縁部に多くの旧家が点在する八王子市でも、住宅の新築、あるいは当主の交替などにより、長く各家で保存されてきた古文書は日々散逸の危機に直面しています。こうした状況において、市内各家の古文書残存状況を把握し、将来的にその保存・普及活用役に役立つため、調査ボランティアを発足する運びとなりました。

調査内容 調査では、各家所蔵文書の年代、種類、点数等を記録し、それらをまとめて後日仮目録を作成します。併せて写真撮影も行います。当初はゲンボール〇箱、という数え方を想定していましたが、調査を開始すると所蔵点数が数十という家が多かったため、調査ボランティアの人手をかり、できる限り詳細な記録をとるよう努めています。仮目録は一部を調査対象となった家に送付し、一部は郷土資料館に保管しています。

ボランティアの募集 活動内容が以上のような古文書調査であることから、調査ボランティアには、当初からある程度の専門性が求められました。古文書からその年代や性質等、最低限の情報を読みとる必要があったためです。従ってボランティアの公募はせず、市内で自主的に古文書学習を行うグループ（古文書を探る会、近世の古文書を学ぶ会、もみじ会、みずきの会）に声をかけました。代表者との会合と参加希望者に対する説明会を経て、初年度（平成13年度）の発足時には21名の調査ボランティアが集まりました。ボランティアの登録は年度毎とし、今年度（平成14年度）には引き続き20名の調査ボランティアが登録を行い、活動しています。

調査計画 郷土資料館では古文書所在調査について、地域ごとを調査対象とする計画を立てました。最初に調査対象となったのが、市西部に広がる恩方地区です。面積においても広範囲にわたる恩方地区については、現段階で調査可能な家についての調査は一応終了し、現在は恩方地区の北に位置する小津地区、美山地区へと調査を進めています。今後も調査範囲を市北部へと拡大してゆく予定です。

調査までの手続 調査対象地区を決定したうえで、次は調査先をどのように選定するか、これは非常に重要な課題でした。恩方地区においては、調査ボランティアの中に地元在住の方が含まれていたため、こうした方からの情報提供により調査先のリストアップを行いました。手順としては、郷土資料館より調査候補家に依頼状を送付し、その中から承諾を得られた家について日程調整を行って訪問する、という段階を踏んでいます。現在のところ調査は月1度のペースで2~3家を

訪問するという体制をとっており、調査ボランティアは調査家の数に応じ、班ごとに分かれて行動しています。その他、調査ボランティアは半年に1度の割合で郷土資料館に集まり、結果報告や疑問点・問題点等を話し合う機会をもっています。

調査結果 平成15年1月段階での調査結果は、平成14年1月からの1年間で24家を調査、合計2,427点の古文書の所在が確認されています。うち1家では文書量が膨大なため郷土資料館で一括借用し、整理保存する方向で検討しています。その他にも、調査中古文書の寄贈や寄託を申し出られた家も多く、その都度郷土資料館で協議の上対応しています。

今後の計画と課題 今後の課題としては、調査地区が変わることにより地元の情報をどのように入手するか、市の中心部については古文書の残存がほとんど見込めない、等の点が挙げられます。また、調査中の古文書の寄贈・寄託の要望は今後も増加すると思われる、館としての的確な対応が求められます。調査ボランティアについても、現在は10名前後の人数が1班となって行動しており、調査先によっては大勢で訪問されることを負担に感じられる場合も少なくありません。今後、より調査に習熟し、少人数で行動できるようになることが望まれます。

何のための博物館ボランティアか

府中市郷土の森博物館

ボランティアの導入は、人件費の節減のためではない。結果的にそうなることがあるかも知れないし、それも望ましいことは否定しない。「ボランティアによって支えられています」と謳えば、営利会社を除いてどの組織においても聞こえはいいから、ボランティアの活動はさかんになる。昨今の博物館も例外ではない。幸か不幸か、時節がら予算削減の強い要請がボランティアを元気にさせたとも言えそうである。

しかし、博物館ボランティアの何よりの目的は、「市民参加」であろう。ひところ「市民のための博物館」というスローガンがあったが、公共施設である以上、当たり前の話で、では今まで誰のための博物館だったの？という具合になる。これからは「市民とともに育む博物館」だと思ふ。

ボランティアが単なる無償の下請けではなく、運営に関与するものだとすれば、導入にあたっては、それなりの準備と覚悟が必要である。それにも関わらずこれからの博物館のあり方のひとつとして、ボランティアの導入を図ることはたいへん意義のあることなのではないだろうか。

当 府中市郷土の森博物館では、こうした社会情勢の変化にも対応しつつ、館の運営方針としてボランティアの導入を決め、その制度を2000年末に発足させた。開館して15年が経過しているが、その間には自然発生的なボランティアを受け入れてきた経緯がある。古文書講座を受講し修了したが、まだ続けたい方たちはグループを作って館蔵古文書資料の整理を行っている。米作りや縄文土器製作の体験学習をぜひ手伝わせて欲しいという方もいた。あらかじめ「友の会」を組織するのではなく、それぞれの催しや場所に集う人たちが、これからもサポーターとして続けていきたいと言ってくれたときに博物館におけるボランティア活動が始まる。ところがこうした機会やきっかけをごく少数の人たちに限定してしまうのではなく、門戸は平等に開いておくのが望ましい。活動の分野や裾野も広がる。こうして始まったのが登録制、グループ別のボランティア活動である。

現在では、この呼びかけに応じた計71名のメンバーが、5つのグループに分かれて自主的に動いている。I班は博物館資料の整理や展示、市内の民俗調査などを担当。II班は、「ふるさと体験館」での「昔遊びをしよう」の主催と米作り体験「こめっこクラブ」の手伝いなど。III班は、茅葺き農家のくん煙と案内、水車のソバ挽き。IV班は、広い「郷土の森」園内の草花の手入れなど。V班は古文書の整理と解説。活動日は班ごとに決めるが、月に2回から8回程度とまちまち。登録申請の条件は18歳以上。実際の参加者層は現役の学生からさまざまだが、60代の方が多い。経費は活動に必要な最小限の消耗品のほかはボランティア保険の保険料のみ。お茶一杯出さない(お湯は提供することもある)。研修のための見学会も自前である。全体を庶務係が統括するが、I・II・V班の内容は学芸係が担当する。館職員は必要に応じてボランティアに助言をする立場である。

まる2年が経過しての感想。「市民の力」は予想以上のものであったということができる。学芸分野に限って見ても、展示室や復原建物での季節的な展示(節句人形や正月飾り)、大掛かりな民俗調査と資料受け入れ(この1年は鍛冶屋と銭湯)。要請急増の「総合学習」に対する体験学習の対応。どれもボランティアの活躍がなければ実施が難しいものばかりである。広い施設内、どこかでだれかの活躍が見られる。博物館全体での活気と、どこにも「市民の目」があるという意味での適度の緊張感も出てきた。

ボランティアの活動は、頼んで仕事をお願いするような性格ではなく、館はあくまでも機会を提供し支援していく側に立つ。逆にそれだからこそ、館のコンセプトや運営方針をこれまで以上に明確にさせ、それを市民やボランティアとともに共有化していくことが大

切である。ボランティアの自主性を重んじるか、従属させておくかの択一ではなく、博物館運営に「参加」してもらうことが重要である。これはけっして専門分野や既得権に対する侵害ではなく、逆に学芸員の専門性や博物館の存在根拠を高めていくことになろう。市民や利用者の視点にたった博物館の活性化は、そのことを前提にして成り立つのではないだろうか。

市民との協働による

「青南国民学校の神代村疎開展」開催

調布市郷土博物館

平成14年8月13日から19日まで、調布市文化会館たづくりを会場に「青南国民学校の神代村疎開展」を開催し、昭和19(1944)年8月、北多摩郡神代村(現・調布市)に学童集団疎開でやって来た赤坂区立青南国民学校(現・港区立青南小学校)の子どもたちが、出征した担任の先生に書き送った手紙や葉書を中心に関連資料を展示し、子どもたちの目を通して見た戦争中の暮らしや空襲の様子を紹介しました。

子どもたちの手紙を大切に保管してきたのは当時、青南国民学校の教員だった飯塚義一氏です。飯塚氏は、師範学校を半年繰上げ卒業後、青南国民学校に着任しました。年齢が19歳と若く、スポーツの得意な新任の先生は、子どもたちにとって兄のような存在でした。疎開生活開始から1ヶ月半が過ぎ、前橋の陸軍予備士官学校へ行くことになった先生を京王線の仙川駅で日の丸の小旗を振って見送ってから、誰が言うともなく、先生に手紙を書こうということになりました。手紙には寮での生活、目の当たりに見た空襲、季節の移り変わり、寮の庭を開墾して植えた野菜の育ち具合、勉強の進み具合、兵隊ごっこなどの遊び、地元の人びとや子どもたちとの交流などが活き活きと綴られています。

この資料を発掘したのは、『僕の調布にも空襲があった』『続僕の調布にも空襲があった』『調布にも引揚者寮と戦災者寮があった』(いずれも自家版)の著者、古橋研一氏です。子どもたちの便りを展示しませんかという古橋氏からの提案を受け、調布市市民参加推進室と郷土博物館の共催という形で展示が実現しました。

展示に先立って関係者に当時の体験を語っていただき、調布ケーブルテレビジョンの協力でビデオを製作、展示会場で上映しました。また全国疎開学童連絡協議会から、学童疎開全般を紹介するパネルを借り受けて同時に展示しました。古橋氏とその協力者、連絡協議会の方々には、展示作業にもご協力いただきました。

来場者に対して実施したアンケートでは戦後半世紀を経過する中で、貴重な資料が保存されていたことへ

の驚きやせっかく集まった資料を何らかの形でまとめて残せないだろうかという声が多くありました。このような反響に後押しされて、青南国民学校の学童疎開に関する資料をまとめることを検討しています。

市民参加講座

「史跡ガイド養成講座」の試み

福生市郷土資料室

近年、博物館の事業には市民参加の活動が広く唱えられています。資料整理や展示物の解説員など、多種多様なものがその対象となっており、数多くの事例や実施結果が報告されています。福生市郷土資料室でも市民参加型の事業として、「史跡ガイド養成講座」を平成11、12年度に企画しました。この講座は二カ年事業として開催し、市内に残る史跡や文化財を紹介する人材を養成し、これらの普及をはかることを目的としたものです。今回はこの講座の内容を紹介し、問題点や課題、今後の展望について考察してみたいと思います。

福生市では、これまで文化財の保護・普及を目的とした「福生市文化財保護条例」を昭和48年に制定（昭和54年全文改正、平成3年4月1日一部改正）し、学術的に貴重な文化財は福生市登録文化財台帳に登録、さらにこのうち重要なものを福生市指定文化財に指定して保護しています。これら市内に残された貴重な文化財の状況を把握するため、「文化財総合調査」を昭和45年から実施し、文化財指定・登録のための基礎的資料づくりを行ってきました。調査報告書は現在までに31集が刊行され、その結果、平成14年度で市指定文化財は33件、市登録文化財は60件をかぞえます。福生市の人口は約6万人、市域も狭く、文化財の所在確認である文化財総合調査は、ほぼ終了しつつあると考えられます。

そこで、今後の文化財保護、普及活動の一環として、「史跡ガイド養成講座」を企画しました。これは市民対象の講座で、市民に市内文化財の基礎的な知識を修得してもらい、今後の保護活動に役立てます。そして最終的には参加者を、史跡・文化財を説明・紹介できるガイドとして養成することを目的としていました。背景には文化財総合調査が開始されてから、すでに30年が過ぎたということがあげられます。当時は調査を行なうにあたり、考古・歴史・民俗・自然など各種の分野に専門的なチームを組織し、調査結果の報告書を刊行し、文化財の普及をはかってきました。これと同時に、市民対象の史跡・文化財巡りといった企画事業は、これまで調査担当者や福生市郷土資料室の職員が講師となり対応してきましたが、近年は調査担当者の

高齢化や職員不足、市内在住者の郷土史研究者不足などにより、文化財の保護・普及のための後継者の育成が急務となっています。

「史跡ガイド養成講座」は、「入門編」10回、「中級編」10回、「上級編」10回の計30回の講座で実施しました。内容は、

○入門編・市内の文化財紹介と、実地踏査
○中級編・専門講師による福生の歴史の講義
○上級編・福生と関連する多摩の史跡見学
です。時間は、水曜日午前コースと土曜日午前コースの2班を設定しました。これは参加者の仕事や家庭環境に関係なく、より多くの市民が講座に参加できるように配慮したためです。

その結果、水曜日は29名、土曜日は5名の参加がありました。土曜日には一般に仕事を持つ若い方が参加すると考えていましたが、その希望者は少なく、逆に水曜日に参加者が多く集まりました。仕事を退職された方や主婦の方の参加が目立ちました。これまで講座はほぼ土曜日に開催していたので、予想外の結果でした。

また参加者の目的やレベルもまちまちで、歴史に興味がある人もいれば、福生市のことを知らないから勉強のため来た人など様々でした。課題などが苦手な方も多く、自主性をもって学習することは困難と判断し、入門編が終了した時点でガイド養成を目的とせず、史跡・文化財の所在や簡単な内容を知人や家族に紹介できる講座へと、その方向性を変えて進めていきました。そして現地見学や、実際に資料を見るといった学習を増やしました。



今回の講座では、残念ながら最終的に当初の目的通りガイドという形で養成できた方はいませんでしたが、初めての試みとして、参加者の意識や傾向などのデータを収集でき、今後への参考とすることができました。そして現在、この講座の卒業生の数名が、地域の歴史サークルや古文書研究会に参加し、郷土史の学習と史跡見学などの活動を続けています。福生市郷土資料室では、このような市民や団体への資料の提供や企画の

協力、調査法の指導などを引き続き行なっていき、人材の育成をはかっていきます。平成11年には『福生市史』の普及版『福生歴史物語』が刊行されました。今後はこれをベースに市民対象の福生市史普及講座を企画し、今回の講座の結果をふまえて、市民レベルのガイドの育成、そして文化財の次世代への継承を考えていきたいと思ひます。

五日市郷土館のボランティア

あきる野市五日市郷土館

あきる野市生涯学習センターでは、市民を対象に郷土の歴史、自然、文化等を学ぶ講座を開催し、その受講者が市民解説員となり知りえた知識で、各社会教育施設でボランティアとして来館者に展示品等の説明をしています。各施設には、日程表が配布され当番の者が派遣されて来ます。ほかに、市民解説員主催で市内の施設、名所旧跡や神社仏閣などの案内と説明をする「市内探訪」を実施しています。

五日市郷土館には、土曜日、日曜日の午後1時から4時まで古民家で待機して、来館者に古民家についての構造や歴史を説明したり質問に答えたりしています。希望者には、郷土館内の展示品説明や質問にも答えています。また、団体の来館予約で解説希望のある時は、1週間前までなら生涯学習センターへ派遣依頼を提出し、センターで日程の合う者を探し派遣されて来ます。

小学校3年生では「昔の暮らし」についての勉強をしています。市内の12校中11校が郷土館を利用して、それにも市民解説員の派遣をお願いしています。見学時間や授業の内容は学校ごとに違うので解説員は、直接学校の担任教師と打ち合せをして実施しています。熱心な解説員は、事前に郷土館へ来て展示品を再確認して、その物についてまた勉強するなど、子ども達に間違っただけを言っただけではいけない、分かりやすく話したいなど努力しています。子ども達と接して市民解説員としてボランティアをすることが非常によかったという声を聞きます。

解説記録には、市民解説員として説明や質問に答えるだけでなく、囲炉裏を囲んで一緒にお茶を飲みながらの会話が記載されています。年配者で、同じような萱葺屋根の隙間風の通る家に住んで居たので懐かしく思い出し、昔の生活など会話が弾みいろいろ勉強になったこと、お茶が好きな方で、このお茶は美味しいが水道水ではないのではないかと聞かれ、湧水を汲みに行き使っていることを伝え、水の違いが分かってもらえて嬉しかったことなどがあり、楽しく解説している

と思われまひます。しかし、雨天で来館者が0のときなどは、帰る際「今日は一人も来ませんでした」と言われると気の毒で、次回の当番の時は多くの来館者が来ることを祈っています。

古民家には、昔の農具（石臼、唐箕、蚕の飼育道具、籠、背負い梯子など）も数は少ないが展示してあります。しかし、実際に自分で使ったことのない、また、古民家のような家に住んだことのない解説員さんが多数います。農業経験者や同じような古民家で生活した来館者が、昔を思い出し体験談などをする者が多く、それを聞くことが非常に勉強になるようです。自己の余暇を利用して、昔の住居、農業・林業・商業・漁業などの道具、地域の歴史、自然などの勉強をして、その知識を市民解説員として多くの者に解説し、後世に伝えることは大変貴重なことであり、郷土館発展にも寄与されているものです。また、市民解説員としてのボランティア活動を生きがいにしている者もいて、市民解説員ボランティア活動の、益々の発展を祈るものです。

展示説明員の活躍

羽村市郷土博物館

はじめに 平成13年度は、39,193名もの方々に来館いただきました。そのうち、15,318名が小学校の団体による児童数です。平成14年度から実施されている新指導要領において、小学校3・4年生の社会科で学習する内容として「地域の地理的環境、人々の生活の変化や地域学習の発展に尽くした先人の働きについて理解できるようにする」との目標が掲げられています。これを受けて、東京都教育委員会が作成する副読本には、具体的な先人の例として渋沢栄一や青山士とともに玉川兄弟が挙げられています。玉川兄弟については、以前の指導要領による副読本にも取り上げられており、多くの小学生が東京都の偉大な先人として玉川兄弟を理解し、玉川上水について学習してきました。

承応2年(1653)に開削されたとされる玉川上水は、羽村から多摩川の水を取り入れています。「進取の気性」といわれる羽村人の基盤となっているのが玉川上水であり、羽村市民は大きな誇りを持って上水に接してきました。当館では、そのような歴史・文化を正しく次代に引き継ぎ、市民の学習の場として機能し、多くの情報提供ができるようにと、玉川上水に関する資料を展示の中心に据えています。そのような当館の展示が絶好の教材となるということで、多くの都内小学校が社会科見学などで訪れるのです。公立小学校は勿論のこと、私立小学校も多数利用いただいています。

昨年度の本紙で懸念した来館される学校数の減少については、今のところ担当者の杞憂に終わりました。これは、前年踏襲型の引き継ぎによる玉川兄弟の存在感の大きさもあるでしょうが、なにより、当館の展示説明（員）制度が広く深く各学校に浸透している賜物と理解しています。

展示説明員制度のはじまり 平成3年5月、市民公募による「展示説明員養成講座」を開講し、9月より展示説明員制度を事実上スタートさせました。これは、前述の通り小学校4年生の団体入館が多いため、求めに応じて常設展示の説明をすることで、より学習効果を上げられるようにとの思いが背景にありました。

展示説明員制度の概要 前述の通り、学校の求めに応じて説明を実施するため、学校の予約の段階で説明希望の有無を確認し、希望のある場合にはその時間帯に説明員を配置します。当初とは運用上の変更があり、現在では1時間単位の拘束時間としています。当館の展示説明員制度は「無償」ではなく、時間単位の謝礼を支給しています。また、1日に複数校が展示説明を希望する場合には、入館時間に最低30分の時間差を設けて、2名の説明員を配置することもあります。

説明は、オリエンテーションホールに全体を集めて集団説明となります(前号当館記事の写真参照)。1校あたりだいたい15~20分程度、玉川上水、特にその歴史と役割について説明をします。現在では各学校の学習の進み具合なども考慮に入れて、重点的に説明して欲しい個所の希望も取り入れています。質問などに答えた後、展示室で個々に説明する場合もあります。

さらに、月1回定例会を開き、説明内容の統一や説明方法の研究、時には館外研修などを行います。翌月の担当もこのときに調整します。

展示説明員制度の発展 学校の求めに応じてということでしたから、自然と説明の内容は玉川上水に限定されるようになりました。展示説明員は、相手が小学生であろうと、決して手を抜くことなく、自己学習を進め、玉川上水に関する知識を深めてきました。古文書が読めた方が原文書の理解ができると感じれば古文書の読解について勉強し、現在の玉川上水の様子を知らなければ子供達の質問に答えられないと思えば羽村から四谷まで歩き、さまざまな方々から聞き取り調査をして、日々研鑽を進めてきました。結果、当館学芸員と同等か、場合によってはそれ以上の知識を有するに至りました。

評判が評判を呼ぶとはこのことで、現在では来館する学校のほとんどが展示説明を希望します。中には、当館の見学には必ず展示説明が付くと誤解されている先生方も少なくありません。さらに、事前に質問事項をファックスで送ってきて、当日それに答えることもあります。

展示説明員制度の後継育成 しかし、現実としてこの展示説明員制度は岐路に立たされています。学習指導要領の改訂に伴う来館校の減少については杞憂であったと先に述べました。けれども、後継者問題という職人世界での大きな壁がここにもあるのです。

実際のところ、当初スタートした時の要員は6名でした。すべてが家庭の主婦で、貴重な時間を割いて協力いただいていたのですが、今年度はその中から3名を残すのみとなってしまいました。この間、何も手を打たなかったわけではありませんが、結果として後継を補充することなく当初の人たちに頼ってきました。後継として、展示説明をしてみてもいいという人たちに集まってもらい、当館の展示に関する講座、特に玉川上水について学習した後、先輩説明員の説明を見学すると、自分たちにあそこまで出来ないと自信をなくされ、説明員まで育たないのです。それほどまでに自立した先輩方は、大変誇らしいのですが、それがネックとなって後継が育てられなくなるとは予想もしませんでした。これからは、教員退職者の人たちにも声をかけていくべきであると考えています。

また、説明を学校側の来館時間にあわせるため、決まった時間に説明をするというわけにはいきません。予定は基本的には1ヶ月前ぐらいにはわかるのですが、1週間前ぐらいにあわてて予約する学校もなくはありません。相手の時間に合わせられるフレキシブルさが要求されます。これも後継者が育てない要因の一つと考えられます。

制度発足より10年以上が経過し、現在の展示説明員だけでは持ちこたえられなくなってきています。早急に後継を育成して、来館される学校の希望に応えなくてはなりません。

展示説明員制度が抱える問題点 これまで述べてきたとおり、当館の展示説明員制度は各学校に受け入れられ、大変誇りのある制度であると自負しています。しかし、ここにはいくつもの問題が内在しています。後学のためにそれを整理しておきます。

まず第1に後継育成の点です。これは前述の通りです。第2として、説明内容の個人差があります。研修会や他の説明員の説明を聞くことで、最大公約数の説明内容は各自が理解できます。当館としては各学校に同じレベルの説明をしたいという考えがありますので、この最大公約数がきちんと説明されていれば問題はないと考えます。しかし、解釈については大問題となります。当館では、玉川上水に関する展示の基礎資料は『上水記』の内容に基づいています。当然展示説明においてもこの資料に基づく説明となります。江戸時代の玉川上水に関しては、建設当時の資料がなく、明確な事実を知ることは不可能です。後世に記録された資料には、『上水記』のほかに工事の期間や費用などにつ

いて異なるものがあります。どれが正しくてどれが間違っているといった次元の問題ではありません。解釈の問題です。当館では『上水記』の記述によっているということに過ぎないのです。それを、自分の解釈ではこうだからといって、『上水記』の内容を否定されたり、違う説を説明することは許されません。個人の学習が高まるに従って、いろいろな解釈をしたいと思うのが研究者です。そこの線引きを最初にきちんと押さえておかなければならない問題です。

第3として、謝礼の問題があります。臨時職員でもなければ研究者としての講師でもない展示説明員は、身分的に非常に不安定な位置にあります。いっそ無償なら博物館ボランティアとして堂々と存在をアピールできます。しかし、展示説明のために実地見聞に出かけたり、資料を購入したりという努力に、何か報いるために謝礼を支払ってきたという経緯があります。

そして、最後に博物館との関わり方があります。博物館ボランティア制度のある館にも共通していると思いますが、個人対博物館なのか、グループとしてのまとまり対博物館なのかで、関わり方が異なってきます。これは主体ということにも関係してきます。

おわりに 当館の展示説明員制度について概略をご紹介します。問題点を整理してみました。今後も積極的に取り組んでいきたい事業ですので、いろいろとご指導、ご教示いただければ幸いです。

市民参加の現状と課題を考える

立川市歴史民俗資料館

ボランティアの活用と市民参加型の館活動について、当館で紹介できる事例は多くはないが、現在の課題と今後の展開を考えてみたい。

最近、ボランティアを館活動に活かそうとする取り組みをよく耳にする。阪神淡路大震災の支援ではボランティアが大活躍したそうで、ボランティアがかなり社会に活かされてきたようである。しかし、欧米に比較すると、日本ではボランティアに対する認識がまだまだ低いように感じられる。ボランティア活動がうまくいかない原因のひとつは“ボランティア=無償奉仕”という図式だけが先行し、採用側は人件費のかからないアルバイトとして考えているが、ボランティア側はそこまで期待されても困るという双方のズレが考えられる。ボランティアについての認識不足を改める必要がある。

当館では現在までボランティアを取り入れた本格的な活動は実施していない。しかし、今後はボランティア（市民の力）を活動に活かそうとする方向にシフト

するであろうし、また、潜在的にボランティアの志望者はかなり多いとも予想される。したがって、今後、先進的にボランティアを取り入れている館の事例を学ばせていただきながら、ボランティアを活かせるような分野の研究をする必要があると考えている。

なお、当館では土日祝日に市民団体に展示解説を有償で委託しているが、これは職員が手薄な土日祝日を補佐するもので、ボランティア活動として位置付けてはいない。

市民が参加できる館活動として当館では、現在、体験学習が主体となっている。平成13年度には14回の体験学習を開催した。(附属施設古民家園実施のものは除く)七夕など年中行事に関連するものが6回、竹細工や手打ちうどん作りなど郷土の伝統を学ぶものが5回、文化財めぐりなど市内を散策するものが2回、講演会が1回という内容であった。14回の体験学習を通し、のべ479名の参加があった。参加者の傾向は“食”に関するものなどいわゆるおみやげ付の事業は人気が高いようである。今後、体験学習としての範囲を逸脱せずに、市民のニーズに応じたテーマをいかに設定できるかが課題となっている。

一方、当館の収蔵資料の多くは市民からの寄贈品である。やや乱暴だが、間接的な市民参加と考えられなくもない。

現在まで館が活動してこれたのは多くの市民に支えられてきたという事実も否定できない。しかし、現在の当館における活動は、体験学習にしる企画展にしる“市民=お客”という図式であり、市民と館の間にはまだまだ距離があるといわざるを得ない。“市民=お客”という一元的な考え方を一步すすめて、館と市民が一体となって活動できる機会を探ってみる必要があるだろう。難しい面も多々あろうが市民企画の体験学習や写真展など、できそうなことから始めてみたい。昨今の博物館・資料館をとりまく環境は例年厳しさを増しているが、逆に、市民が参加できる環境作りへのチャンスとして、今後の館活動につなげていきたいと考えている。



日野の古文書を読む会とふるさと博物館

日野市ふるさと博物館

日野の古文書を読む会は、平成5年に日野市中央公民館が行なった「初めて古文書体験教室」に参加したメンバーが、受講後の平成6年1月に立ち上げたサークルで、今年10周年を迎えます。

メンバーは40～70代の男女から成っており、主なメンバーの職業は会社員や公務員、主婦など様々で、定年退職や子供の成長を機に新たに古文書の勉強を始めた方々です。

この会は、毎月の例会講師を会員が交替で担当するばかりか、日野市中央公民館が開催した、その後2回の古文書入門講座「やさしい古文書体験教室」(平成6年秋)、「古文書で読む江戸時代の旅」(同11年秋)の講師をつとめ、また会員向けに「古文書学習の手引き」を編集・発行し、さらに一般向けの歴史講演会「江戸幕府の代官と多摩地域」(講師村上直先生・年1回連続3回)、「児玉幸多先生のお話を聞く会」(講師児玉幸多先生)を主催するなど、古文書を読み、地域の歴史を勉強するのが楽しくてしかたがない会に成長しました。

日野の古文書を読む会の有志による研究部会は、平成6年10月、日野宿の間屋兼日野本郷名主である上佐藤家の襖下張文書の調査(下張りのため切断された状態の文書のなかから同一文書を見つけて修復・接合・分類して袋に詰め、目録をとる)・解読のために発足しました。これまで解読した書状件数は四百数十通に達しています。

またこの研究部会は、平成10年に当館で行った市制35周年記念企画展「日野新選組展」に併せて、『八王子千人同心井上松五郎 文久三年御上洛御供旅記録』を解読し、出版しました。これは、新選組隊士井上源三郎の兄松五郎が14代将軍徳川家茂に従って上洛した際の日記で、旅日記としての面白さに加え、新選組として組織される以前の近藤・土方・沖田・井上らの動向が記された、新選組研究にとって重要な史料です。また当博物館が発行・配布しているリーフレット「殉節両雄之碑」は、明治時代に高幡山金剛寺に建てられた近藤勇・土方歳三の顕彰碑(原文は漢文)に読み下しと注釈・解説をつけたもので、同部会が解読編集したものです。こうして培った力が、博物館での活動に遺憾なく発揮されています。

日野の古文書を読む会や同研究部会の地元に密着した地道な活動には、日野の郷土史家であり、日野市史編集委員(現在は日野市古文書等歴史資料整理編集委員会委員)として市の歴史編さんに長年かかわってきた谷春雄氏の指導と援助があります。また日野市史編

さん担当の職員が史料の選択についてアドバイスをしたり、市内の古文書を解読演習の史料として提供するなどして会の活動を支えてきました。そして平成10年に市史編さん事業が終って、日野市史の活動の場が当館に移ったのを機に、当館も古文書の会と深く関わるようになったのです。

研究部会は、現在、週1回当館講座室に集まって部会としての活動を行ったり、博物館に寄贈された膨大な資料や期限つき借用資料の目録とりや、展示に必要な文書の解読、日野宿瓦版などのリーフレット作成などのボランティア活動も行っています。さらに週1回、有志が集まって谷氏から江戸後期から明治・大正・昭和にかけての日野宿の変遷に関する聞き取り調査を行っています。

博物館へのニーズは学校教育面や生涯学習社会の中で増すばかりです。限られた職員で展示をはじめ学校教育との連携や体験学習会・講座、レファレンスなど様々な業務を行わなければならない、膨大な資料・情報の調査・整理を十分行うことができないのが現状です。そのような中、同会のような手助けはとてもありがたいマンパワーです。一方同会でも、整理作業などは様々な資料に実際触れることができるまたとない機会であり、常に新しい教材を入手することにもなるわけですから、会自体の学習活動に広がりを出すことができます。そしてこのような「お互いに支えあう」の関係こそが、会との良好な関係を保つ上での不可欠要素であり、このような人々を各分野で育てることこそが、限られた人員の中で館の活動を広げる鍵になるのではないかと考えます。

市内にはこの他にも、「歴史と民俗の会」や「日野の昭和史を綴る会」など様々な会が活動しています。「日野の古文書を読む会」が10周年にあたる本年、当館では展示の中でこれら団体の活動を順次紹介する予定です。博物館はこれらグループに活動の場と資料を提供し、後継者育成のための講座を開くなどしてその活動を支援すること、そういった関係性を築けるよう、これからもがんばっていききたいものです。

ボランティアが伝える昔の暮らし

―小学生民具案内―

くにたち郷土文化館

当館でのボランティア活動の典型的なものとして地域伝承グループによる「民具案内」及び「我ら稲作人」、市民指導者による「星空ウォッチング」が挙げられる。ここでは民具案内を中心にボランティア活動と博物館の関わりについて述べる。

1. 民具案内の経緯 民具案内は、もともとは市立第一小学校にPTA父母や市民の手で集められた多くの民具（昔の農具や生活道具類）を使って、学校、教育委員会、地域のボランティアグループ「くにたちの暮らしを記録する会」（記録する会）の人たちが小学3年生に当時の話を聞かせ、実際に道具を使ってみせ、体験学習の場として案内しようということで昭和50年代に始まった。

案内役の「記録する会」のメンバーには50代から60代の主婦や70代から80代の農家の男性ら10数名が参加し、教育委員会社会教育課とともに民具の収集や聞き語りの記録集作成などの活動をボランティアで行ってきた。メンバーは家事仕事の合間を縫って、また、農作業の合間を縫って案内役を買って出て、それぞれの持ち場で体験談や伝統的な技を生徒たちに伝えてきた。

案内役の人たちが第一小学校の2つの空き教室に生徒たちを案内し、そこに保管されている民具類の使い方を説明する。臼や杵、鋏、千歯扱き、万石といった道具を見せ、使い方や仕事振りなどについて話をした。続いて視聴覚室では部屋を暗くし、ランプに明かりを灯し、まだ電気はなくランプしかなかった時代の暗さと明るさを実感してもらう。ここでは記録する会の年長者が昭和初期の暮らしぶりや子供の遊びなどについて話をした。さらに、石臼を使って生徒たちに臼を回させ、実際に大豆を挽き、きな粉になって出てくるところを見せる。ここでは案内役が「石臼ひき歌」を歌って聞かせた。最後はわらを使って、縄ないを体験する。このような体験学習を案内役ボランティア、教育委員会、学校の3者が一体となって、午前中に行ってきた。毎年、公立小学校8校のうち5、6校が参加した。

2. 案内役の役割 その後、平成6(1994)年にくにたち郷土文化館ができたことをきっかけに、翌7年1月から郷土文化館に移行して民具を使った体験学習を主体とし、公立8校に私立3校を加えた11小学校の3年生を対象に総合学習の一環として、記録する会の人たちの協力を得て毎年2月を中心に行っている。会場には講堂、研修室、歴史庭園、伝承庭園、展示室などほとんどの施設を使っている。民具案内の期間は11小学校の3年生約900名が当館に訪れ、冬の風物詩ともなっている。

郷土文化館では、まず講堂で行灯や提灯、手燭、がんどう、ランプなどさまざまな明かりの道具を見て、部屋を暗くして実際に各道具に明かりを灯し、記録する会の年長の会員から解説を聞き、電気がない頃の生活ぶりを学ぶ。次に歴史庭園と伝承庭園でくずはきかごやもっこ、野菜かご、背負い梯子など運ぶ道具を担いでみる。明治時代と思われる大八車もグループでひいてみる(表紙写真)。一方ではたらいに水を張り、洗



濯板でハンカチを洗ってみる(写真)。また、石臼で大豆をひき、きな粉にする過程を体験する。それぞれの場面に案内役がついて指導する。そして、全員が研修室でわらを使って縄ないを行う。多い学校で120名以上の生徒数になるが、縄ないの指導には15名のメンバー全員があたり、まさに手取り足取りの指導になる。初めての縄ないに戸惑う生徒もいるが、30分ほどで一通り縄の状態までに仕上げる。中には2本つないで縄跳びの縄にする生徒もいる。自分でわらから縄をなえたことに大喜びである。

3. ボランティア活動と博物館 これらの案内を通して生徒たちは、教室の勉強とは一味違う学習をし、自ら体験する感動を味わうことになる。最後のまとめ会では、生徒たちから、昔の道具に触れ工夫の様子がわかったことや、石臼の働きの素晴らしさ、縄ないができたことの喜びなど、生き生きとした感想が一人一人から出され、改めて民具案内の重要性を感じさせてくれる。

博物館施設として民具資料を多く収蔵しているが、保存しているだけでは資料が活かされない。これらをいかに活用していくかが大きな課題である。道具が使われていた状況や生活の様子を地域の経験者に語ってもらい、それを生徒が聞き、実際に使ってみて理解が深まる。

記録する会の活動は、民具案内のほかにも「我ら稲作人」での稲作指導や「わら細工教室」でのわら草履作り、注連縄飾り作り、古民家での伝統行事の再現など幅広く、博物館活動を支える一翼を担っている。このように地域の生活文化を語り継ぎ、体験を通して子供たちに伝えていく案内役のボランティア活動は、博物館にとって貴重なものである。会員の高齢化が進む中で、態勢の継続性についても一体となって取り組んでいく必要があると考える。現在では、このような伝承活動に関心を持つ若手の主婦の参加もあり、記録する会の活動を支えている。博物館資料をもとに生きた体験学習を行うためにも、市民ボランティアとの協力関係を強めていきたいと考える。

人から学ぶ、自然から学ぶ

— ボランティアと共にいる総合的な学習 —

東大和市立郷土博物館

「環境教育ボランティア講座を開催します！～総合的な学習の授業をお手伝いいただけませんか？～」こんなタイトルのチラシを、昨年4月に小学生の保護者あてに配りました。講座の目的は総合的な学習の中で、環境教育（自然観察、自然体験を中心とした活動）を行う時のゲストティーチャーを育てるというものです。

この呼びかけに30人以上の方が応募してくださいました。月1回のペースで講座を開催し、さっそく小学校にも学芸員と共に出向いて授業を行っています。

*

*

「わーすごい！」「後ろの方でもやってください！」小学校4年生の授業のひとつ。飛ぶタネの模型を作って教室で飛ばして見せるところです。理科の単元「すずしくなると…」を発展させ、総合の時間にタネについて学習しようということになったのです。

はじめの時間は先生から「みんなで育てたへちまにもタネができたね。タネがいくつあるか数えてみたいね。」と投げかけがありました。こうして子供たちはタネに興味を持ちはじめ、学校や家のまわりでタネを集めるようになりました。

次の時間、学芸員がワークシートといろいろなタネを持っていきました。植物のタネは自分の仲間を増やすため、さまざまな方法で遠くへ運ばれる工夫をしています。ワークシートを使って、風で飛ばされる、動物に食べられてフンとして運ばれる、たくわえられて運ばれる、くっついて運ばれる、はじけとぶなどの運ばれ方があることを学びました。

その後、紙とクリップを使って風で飛ばされるタネ（マツ、ユリ、ツクバネなど）の模型を作ります。なるべく本物と同じような形にすると、ヒラヒラクルクルまわりながら落ちてよく飛ぶのです。

この授業では、ボランティアの方たちが大活躍。子供達のあいだをまわって、適切なアドバイスをしていたきました。そうでなければ、時間内に予定の模型を全て作ることはできなかったでしょう。

次はフィールドワーク。雑木林に出かけタネの採集。「1人10種類は集めたいね」という投げかけに、子供たちは熱心にタネ探しをしていました。もちろんボランティアの方にも来ていただき、いっしょにタネ探しをしました。

今度は、みんなで集めたタネの仲間わけです。タネを運ばれ方によって分けていきました。当然、運ばれ方のわからないタネも出てきます。そこで話し合いが

生まれ、友達の意見に耳を傾け、各自自分の意見を持ち発表できるようになりました。この時間のねらいは、タネの分類について自分の意見を持てる、でした。

最後はタネの標本を作って終了です。運ばれ方で整理する子、採集地別に整理する子、色や形で整理する子…。タネ博物館と名づけて標本整理をした子もいました。

タネの授業は、ボランティアの方たちの協力なくしてできない授業でした。ボランティアリーダーが大勢見えたことで、楽しくわかりやすい授業になったのです。子供たちも喜んでくれました。もちろん、学年の先生との打合せは綿密に行われました。そのことで、先生のはたらきかけ、私たちがはたらきかけが分担され、とても効果的だったと思います。

学芸員が1学年100人を相手に話をしたり、フィールドワークをするには、限界があります。ボランティアの方々にお手伝いいただくことで、より楽しくわかる授業になり、内容も発展させることができるでしょう。行く行くはボランティアの方へ直接学校の先生から連絡が行き、講師の依頼をされるようになると思います。それがこの講座を開催した目的の一つでもあるのですから…。

*

*

講座の内容や授業の様子、今後のお知らせ、ボランティアの方からの意見、感想、子供たちのワークシートや授業の感想などを綴った通信「風のたより」も発行しています。ご希望の方にはお送りしますので、ご連絡ください。



タネの模型作りを見守るボランティア

市民の手で植物標本を

パルテノン多摩歴史ミュージアム

当館の主要事業のひとつに、開館以来ずっと続けている植物観察会がある。多摩市植物友の会という市民団体と手を携えるようにして実施してきたもので、植物を仲立ちとして市民とともに作り上げてきた事業の

ひとつに数えることができるように思う。

■**市民の手で植物標本を** 植物観察会が始まったのは、当館の設立より10年以上も前にさかのぼる1981年（昭和56）のこと。多摩市立郷土資料館（当時は仮称としてこう呼ばれていた）を設立するにあたり、収蔵する植物標本を市民の手で作ろうという目的で、多摩市教育委員会によって始められた。翌年の1982年（昭和57）には、市民団体として多摩市植物友の会が創立され、会員たちの精力的な努力によって、多数の植物標本が確保された。

その後、多摩市立郷土資料館構想は紆余曲折を経て、ホール機能を併設した複合文化施設という形で決着し、1987年（昭和62）に多摩市立複合文化施設（愛称：パルテノン多摩）として開館することになった。

もともと多摩市立郷土資料館設立のために集めた植物標本だったのだが、結局、ホールがメインとなった複合文化施設となったことで、残念ながら当初のねらいとは若干ずれる結果となってしまった。とはいえ、開館と同時に、当館主催の植物観察会が立ち上がり、以後15年以上にわたって活発に活動を続けている。

■**活発な観察会** 現在では、講座を初級と中級という2つのレベルに分けて実施している。初級は、開設当初からの一般参加による観察会。中級は、植物の知識をある程度有している人を対象にした、より高度な内容を扱う講座である。初級講座では、コース設定から事前の下見、当日の案内、参加者への指導にいたるまで、すべて多摩市植物友の会の会員が持ち回りでおこなっている。遠くへ足を伸ばすというのではなく、もっぱら足もとの自然を見つめていこうという趣旨で、多摩市とその周辺地域をフィールドとして実施している。この観察会で歩いたコースは、『多摩丘陵自然ふれあい散歩道』という本にまとめ、けやき出版より1994年（平成2）に出版し、トータルで7,000部以上を売るベストセラーとなった。



一方、中級講座は、年間を通した継続受講の形式でおこなっていて、年間テーマを決めて深く掘り下げるような観察会をしたり、外部から専門家を招いてより

専門的な話をきいたりしている。この2つの講座は、人材の育成という点で、より有機的な関係をもたせることを念頭においている。初級講座で育った人材は、中級講座でより高度で実践的な知識を身につけ、さらに初級講座でサブリーダーとして初心者への指導にあたるという循環的なシステムを目指している。

■**講座受講生による植物調査** 中級講座では、2000年度より多摩市の植物調査を実施している。年度ごとに、特定のエリアを対象とした植物相（フローラ）調査をおこなうというもので、参加者自身が調査を体験することにより、調査の方法を学ぶことを主眼としている。

年間講師である畔上能力氏（植物研究家）の指導のもとに、確認された植物の種名を調査票に記載していき、後でデータを集計するという方法で調査を進めた。調査結果は、当館が発行する紀要に発表している。

なお、2000年度に実施した「多摩川の植物調査」では、456種（帰化率27.2%）、2001年度の「多摩市南西部の植物調査」では、632種（帰化率16.9%）が確認された。

■**集大成・多摩の植物展** 1997年（平成9）9月には、これまでの活動の集大成として、多摩市植物友の会と当館との共同主催で、「多摩の植物展～15年間のフィールドノートから～」と題する特別展を開催した。これまでの地道な活動の成果を、地域に還元しようと企画したものだ。

準備は2年前から始め、植物友の会のメンバーと、合計21回にわたる打ち合わせをおこなって、展示はもちろん催し物、販売グッズなどの内容を決定していった。14日間という短い会期ではあったが、期間中は4,740人（1日平均339人）の観覧者が訪れた。また会期中には、小ホールを使って、植物友の会会員によるスライド上映会「多摩の植物・映像散歩～私たちが出会った植物～」(参加者291人)や、多摩地域をフィールドにしている市民団体の方々を招いたシンポジウム「多摩の自然環境はいま～人と地域のネットワーク～」(参加者218人)を開くなど、かなり盛りだくさんな内容となった。

市民が主体的に参加して作っていく展示という意味では、一定の成果があったのではないかと自負している。

■**課題は標本整理** 植物友の会メンバーたちの精力的な努力により、集めた植物標本もかなりの数にのぼった。現在は、植物友の会の有志の方々が、まったくのボランティアで整理作業を進めてくださっている。標本整理に来ていただいている会員の方々には、本当に頭が下がる。

ニュータウン区域が市域の6割を占める多摩市では、環境の変化が著しく、外国産の帰化植物が急速に分布を広げている。種の同定も困難を極め、作業はなかなか

かはかどらない。しかし、いずれは植物標本目録を完成させ、インターネットによる公開ができる日を、みんな心待ちにしながら、作業を進めているところである。

最後に、今後の大きな課題として、植物を担当する専任の学芸員がないことを指摘しておきたい。開館当初は、植物を専門とする学芸員がいたため、観察会の運営や標本の整理などについて、専門的な助言などもできていたようだが、担当職員の異動が続き、現在は歴史担当の学芸員が植物観察会を兼務する格好となっている。今後も実りある活動を続けていくためには、植物担当の学芸員の採用がどうしても必要となるだろう。

大学と地域社会を結ぶ繊維博物館サークル活動

東京農工大学工学部附属繊維博物館

繊維博物館サークルは「繊維博物館友の会」事業のひとつとして、昭和55年度から始まっています。サークル設立の趣旨は会員の生涯学習の一端を担うことにあります。博物館の施設を利用して活動を行い、また同時に当博物館の種々の行事にも積極的に参加することを通じて繊維博物館の発展に協力することを目的としています。現在、織物・絹・ひも結び・組ひも・和紙絵・レース・手紡ぎ・型絵染・つまご・手編・藍染・わらの12のサークルが活動を行っており、約260名の方々が各サークルにて学習と創作活動を行っております。このことは生涯学習の実践の場を提供することによって、地域社会に開かれた大学をめざす東京農工大学の大きな特色の一つです。



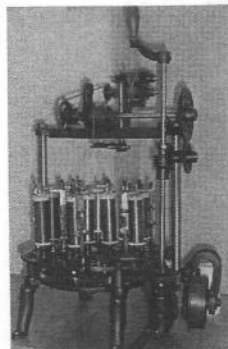
手紡ぎサークルによる講習会

当博物館のサークル活動が今日のように活発になったのは歴代の館長、顧問教官、歴代館員と共にサークル会員の永年の研究と努力の成果によるものです。そのなかで培われたのが、一般のカルチャーセンターにある工芸教室等とはまったく異なる現在の運営方法な

のです。つまり特定一個人のみの指導者の下で学習する方法ではなく、上級生が後輩を指導し技術と知識を伝授する方法を採用しているのが最大の特徴です。また、各サークルは4月の発足式で立ち上げて活動が始まり、翌年の2月に開催される学習創作活動の発表の場である「サークル作品展」を経て、3月の終了式で終わるというシステムを採用していることも活動をメリハリのあるものとしていると思います。そして、会員期間も最長在籍でも4年間で卒業です。下級生であった方も翌年にはそれぞれ指導する立場になっていくわけですから。このようにして学ぶことの楽しさと教え合うことの喜びが相乗効果を生み、よい人間関係を創り出し、サークルでの学習と創作活動が活気に溢れているのだと思います。

さらに、農工大ならではの特征としてサークル活動で使う材料を学内で調達できるものがあることでしょう。たとえば、農学部で羊刈りに行く、附属農場で田植え・稲刈りをして藁を調達するなどには特にユニークな点です。また、これらの材料を用いて一般の方々にサークル活動のエッセンスをお伝えする「サークル講習会」も学ぶことの楽しさと教え合う喜びの場として、内外ともに好評を得ております。加えて、最近ではサークル特別活動の一環として、小学校へ総合学習の講師として招かれたり、地域の公民館などで講習会を開催したりする機会も増えてきました。

繊維博物館の特色ある展示物として繊維素材の他に繊維関連の道具や機械類があります。これらの機械類は動いているところを見てもらうことでより一層展示の効果が上がります。そこで平成11年に「繊維技術研究会」が組織されました。会員は東京農工大学の卒業生を中心とした永年繊維企業で働き繊維関連の技術をもつ人達です。現在では紡績機械や自動繰糸機、自動織機、編機、ミシン、組ひも機などの整備が進められ、小学生が見学に来た時などに機械が動く様子をみせて解説するなどの活動によって大変喜ばれています。



ロビーに置かれた取手を回転させるとだれでもすぐ組ひもが作れる機械。繊維技術研究会の会員が整備しています

繊維博物館では特別展・サークル講習会などの行事はホームページでお知らせしていますのでぜひご覧ください。

URL <http://www.tuat.ac.jp/~museum>

ボランティア「ひじろ会」の活動

- たてもの園のパートナーとして -

江戸東京たてもの園

1. ボランティア活動の内容 当園のボランティア活動は、「来園者のサービスを向上させると共に、市民に開かれた博物館として生涯学習の一環とする」(ボランティア設置要綱)ことを主旨としている。1996年(平成8)12月から試行として開始し、1997年(平成9)10月から本格実施となった。ボランティアには「ひじろ会」という名称がついている。「ひじろ」とはたてもの園の近隣で「囲炉裏」を意味する。これは、ボランティア活動が茅葺民家の囲炉裏に火を入れることから始まったことに由来している。

2002年(平成14)12月現在89名が登録し、火・水・木・金の曜日ごとの班に所属している。土曜・日曜は、各班が分担している。

ボランティア内部の運営として、各班で班長と副班長を選出し、役員会を構成しており園との連絡調整を行なう。役員の中から互選で会長を選出している。

ボランティア活動は茅葺民家での囲炉裏に火を入れることその他、来園者へのガイドやたてもの園の事業への協力や自主活動と相互交流がある。

茅葺民家で囲炉裏に火を入れることは、煙で建物を燻し害虫駆除を行ない茅葺の維持管理に努める活動である。ボランティアが炉端にいて、来園者に民家や道具の簡単な説明や燻煙の効用などを説明する。

来園者へのガイドは二種類ある。ひとつは団体ガイドで原則20名以上の団体に対し約1時間30分ほどで園内をひととおり案内する。もうひとつは、「みどころ案内」といい、園内の3箇所立ち、一般の来園者に向けて、たてもの園のまわり方や当日の催しを5~10分程度で案内する。

たてもの園が行なう普及事業のうち約半数はボランティアの支援を得ている。とくに近年、「昔くらし体験」などの学校との連携事業が増加しており、ボランティアの支援が不可欠になっている。

自主活動は、ボランティアの知識や経験、技能を活かし、たてもの園や来園者に還元する活動である。農家の庭先で作物を栽培して農家の年中行事の事業に活用したり、下町の路地などにあった鉢物を育てたりして生き生きとした情景再現をしている。農家の庭先でわらじや草履などの藁細工を実演したり、移築復元した写真スタジオで希望者を撮影するなどのサービスも行なっている。

相互交流として、毎月1回程度、例会を開催している。各班の意見を交換し情報を共有している。

2. ボランティア活動への支援 ボランティア活動が円滑に進むように、園が一定の支援をしている。

交通費は、実費を支給しているが、ただ上限額を1000円としている。またボランティア保険にはたてもの園が加入手続き・支払いを行なっている。

活動の拠点として休憩棟の3階をボランティア控室として提供しており、打ち合わせや飲食に利用できる。必要な道具や消耗品もたてもの園が支給している。園内施設の利用も優遇し、ミュージアム・ショップや飲食施設での支払いが割引になる。本館である江戸東京博物館の企画展の招待券も配布される。

そしてボランティア活動の質の向上をめざすため、研修等を開催している。事前にアンケートを取り、それを参考に園の担当職員が計画している。1回90分程度の講義形式で年間8回程度勉強会を開催しており、講師は職員とボランティアが務めているが外部から呼ぶこともある。さらに年に1回バスを借り上げ、類似施設を訪問する見学会も開催している。今年は浦安市郷土博物館と国立歴史民俗博物館を見学した。類似施設のボランティアと交流することは、自らの活動を省みることにもなり好評である。

3. ボランティアの資格と登録 ボランティアの資格は、18歳以上ということで制限はない。それ以外には「人と接することが好き」ということを大切な要件としている。ボランティア活動の基本はたてもの園と来園者をつなぐことであり、来園者にじかに接することが多いためである。

登録は基本的に1年間であるが、翌年も活動が続きたい人は更新手続きを取る。大半の人が継続して活動している。今のところ任期や定年は定めていない。

新規登録は毎年1回実施しており、活動状況のみて人数を増やしている。募集案内は当園や江戸東京博物館など、各施設内に申し込み用紙を置くほか、近隣市の広報誌や新聞の武蔵野版などに募集記事の掲載を依頼している。またHP上でも案内している。

希望者は、申込用紙を提出し、4日間の講習会を受講することが条件となっている。職員や活動中のボランティアが講師となり、園の概要や建築史の講義のほか、活動を実際に見て、ボランティア活動の基本を知っていただく。4日間の講習を終えた希望者は正式に登録され、火曜日から金曜日までの曜日ごとの班に所属する。登録すると、園から登録証とボランティアのユニホームである青い半被と腕章が渡される。

4. 今後の展開 - 対等のパートナーとして -

ボランティア活動を含め、当園は現在、大きな転換期を迎えている。厳しい都財政のため、当園の運営は抜本的な見直しの対象となっている。昨年度まで建造物2~3棟ごとに委託による案内スタッフが常駐していたが、それが全廃された。案内スタッフの対応が来

園者に好評だったので、当園としては大きな痛手である。

この状況を打開し、サービスを回復するにはボランティア活動を拡充するほかない。幸い、ボランティアの皆さんがたても園を愛する気持ちを強くもち、「自分たちでたても園を盛り立てよう」という機運が生まれている。そこで活動をいっそう拡充するために、既存の班の人数を増やすとともに土曜と日曜を担当する班を新たに立ち上げることにした。現在の89名を170人規模にすることが目標である。

経費削減に伴うボランティア活動の拡充を、「文化の切り捨てでありボランティアに仕事を肩代わりさせている」と指摘することもできる。しかし積極的な見方をすれば、市民参画による博物館運営への転換ともいえる。経済状況の不振が、生涯学習の場であり、市民運営の博物館といった姿を進展させたともいえるのである。

今後、博物館の運営には市民の参画が欠かせなくなるだろう。このことは博物館にとって切実な問題となる。市民から支持されない博物館は淘汰されるのであ

る。市民にどれだけ貢献しているか、あるいは博物館は自分の居場所でありかけがえのない施設と思う市民をどれだけ生み出せるか、こうしたことが博物館存続の鍵をにぎる。

その一方で運営を支えるボランティア自身の変革も求められる。積極的な連携をはかるためには、博物館活動を補完する立場から、自らの活動に責任をもつ対等なパートナーに脱皮しなければならない。そのためにはNPO法人にするなどして運営の基盤を固めることも一つの選択肢となろう。

たても園のボランティア活動がすぐにNPOになるということはないにせよ、今後、いっそう参画の度合が高まり、たても園の運営の一翼を担うパートナーとなることは間違いない。

【参考】

粟屋朋子 「生涯学習の一環として、生きがいの場として 一江戸東京たても園ボランティアの活動と運営」 『平成13年度調査研究事業報告書 高齢者の社会参加と社会教育行政の支援のあり方』 2002年 東京都立多摩社会教育会館

博物館におけるボランティア活動に関わるアンケート

館名

活動の主旨

活動の有無	形態	開始時期	活動内容	活動日	活動人数	男女比		平均年齢	
						男	女		
有	登録・会員制		展示解説	ほぼ毎日		男	女	～20	
	随時		展示企画	週3～4		男	女	20～	
	その他 ()	資料整理		資料整理	週1～2		男	女	30～
		館外資料調査		館外資料調査	月1～3				40～
		普及事業		普及事業	2～3月に1				50～
		体験学習		体験学習	年に1～3				60～
		文化財管理		文化財管理	その他				70～
		施設管理		施設管理	()				
		植栽管理		植栽管理					
		その他 () ()		その他 () ()					
無									

**博物館におけるボランティア活動に
関わるアンケート - 結果報告 -**
三博協 編集委員会

本誌で「市民の力-博物館活動のひろがり-」を特集するにあたって、編集委員会では、「博物館におけるボランティア活動に関わるアンケート」を実施した。近年全国的に盛んになりつつあるボランティアや市民参加の活動の実態について、三博協会員各館の基礎データを揃え、情報を交換し、運営上の参考に供するのが目的である。

アンケートの実施にあたっては、下記の用紙を2002年11月末日までに会員各館に送付し、翌年2月までに19館より回答をいただいた。

そのうち活動が「有」としたのが10館。「無」としたのが9館である。ただし、「無」のなかには、「活動を始める予定がある」または「活動を始める意向はある」としたところが5館（町田市立博物館・青梅市郷土博

物館・福生市郷土資料館・武蔵村山市立歴史民俗資料館・小金井市文化財センター）が含まれている。

「活動の予定はない」としたところは4館（調布市郷土博物館・瑞穂町郷土資料館・奥多摩水と緑のふれあい館・檜原村郷土資料館）だった。

現在、ボランティアが活動しているという10館と、他に状況を寄せられた1館についての内容を、アンケートの回答のままにまとめたのが、次ページの表である。上段が基礎データの表、下段が活動主旨とその他補足事項である。

重ねて述べるが、それぞれの博物館の規模・設立主旨・運営方針・運営母体はまちまちであり、ボランティア導入の有無が、博物館運営の先進性を示しているわけではない。しかしながら、これからの地域博物館が目指していく方向性の重要な柱として、地域や市民との関わり方を模索していくことは欠かせないであろう。そのための材料のひとつとして、本データや本誌が活用できれば幸いである。

処遇・特典		研修		募集内容		資格		規則・要綱		担当部署		その他	
交通費		定期		随時		年齢		有					
食事・食費		不定期		定期		()		()					
保険		自主管理		不定期		居住地		無					
利用割引		その他		その他		()		その他					
利用優先		()		()		資格者		()					
ユニホーム・作業着						()							
その他						経験							
()						()							
()						その他							
						()							
													活動を始める予定がある
													活動を始める意向はある
													活動の予定はない
													かつて活動していたことがある
													その他
													()

該当する箇所に○印（複数でも可）で回答してください。項目によっては数字が言葉をお願いします。

博物館におけるボランティア活動に関わるアンケート結果

館名	形態	開始時期	活動内容	活動日	活動人数
東村山ふるさと歴史館	随時	2000年10月	公園プランニング	月1～3	20前後
八王子市郷土資料館 同館 古文書調査	登録・会員制	2001年7月 2002年1月	展示解説 館外資料調査	ほぼ毎日 月1～3	28 20
府中市郷土の森博物館	登録・会員制	2000年11月 一部はそれ 以前から	展示企画 資料整理 館外資料調査 体験学習 施設管理 植栽管理	週3～4	71
あきる野市立五日市郷土館	随時 派遣	2000年	展示解説 植栽管理	ほぼ毎日 週1～2	30
羽村市郷土博物館	登録・会員制		展示解説	春・秋に集中	3
日野市ふるさと博物館	登録・会員制	2002年9月	資料整理 文書解読 展示補助	週1～2	13
くにたち郷土文化館	随時	1980年頃	体験学習	1月～3月 (週1～2)	15
東大和市立郷土博物館	登録・会員制	2002年度 1996年度	体験学習 植栽管理	月1～3	30 70
パルテノン多摩歴史ミュージアム	随時	1987年	資料整理 館外資料調査	月1～3	10
江戸東京たてもの園	登録・会員制	1996年12月 施行 1997年10月 本格実施	展示解説 普及事業 体験学習 文化財管理	ほぼ毎日	89

館名	活動の主旨
東村山ふるさと歴史館	「しもやけべ遺跡公園を育てる会」として埋没保存の決定をした市内「下宅部遺跡」の公園づくりを通じ、「成長する公園」をキーワードに公園の造園、事業の企画・運営・維持管理を行う会
八王子市郷土資料館 同館 古文書調査	社会教育事業の一環として博物館活動の市民参加を促し開かれた博物館運営を目指す。
府中市郷土の森博物館	市民ボランティアの自主的な活動を支援・推進することにより、「市民とともに育む博物館構想」を実現していく。
あきる野市立五日市郷土館	
羽村市郷土博物館	
日野市ふるさと博物館	
くにたち郷土文化館	小学3年生 民具案内解説・体験指導
東大和市立郷土博物館	昔ながらの手法による雑木林の管理、及び小学校総合学習における自然環境学習のサポーター
パルテノン多摩歴史ミュージアム	多摩市および周辺地域の植物標本の収集・整理
江戸東京たてもの園	来園者サービスを向上させると共に、市民に開かれた博物館として生涯学習の場を提供するため
武蔵村山市歴史民俗資料館	

男女比	平均年齢	処遇・特典	研修	募集方法	資格	規則・要綱	担当部署
男>女	50～	利用優先	不定期	随時	なし	無	
男>女 男<女	50～ 70～	保険	定期	不定期	18歳以上 市内在住在勤	有	
男>女	60～	保険 ユニホーム	自主管理	随時	18歳以上	有	庶務係 学芸係
男≒女	60～					無	
男<女	50～	ユニホーム・ 作業着	自主管理	随時	特になし	有	
男>女	60～	若干の謝礼	自主管理	その他		検討中	学芸係 庶務係
男≒女	60～	日当程度	不定期	随時	特になし	無	
男<女 男>女	40～ 60～		自主管理	不定期 随時	児童の親 なし	無	事業係
男<女	40～ 50～		自主管理 講座	随時		無	学芸課
男>女	60～	交通費 保険 ユニホーム・ 作業着	定期	定期	18歳以上	有	学芸係

その他
現在は、公園の造園に関する検討を主体的に行っている。今後は、開園に向けて事業の企画や運営活動、維持活動を行っていく予定。また、2003年から、東村山及び周辺の郷土食の伝承のためのボランティア活動をする「伝統食の会」を正式に立ち上げる予定。
公募の展示解説ボランティアと市内古文書研究グループからなる古文書所在調査ボランティアの2本柱
登録制のボランティアを導入する以前から1部のグループが活動。2003年度より常設展示室解説ボランティアの養成も始める予定。現在は資料整理及び展示・体験学習・復元建物・園内景観・古文書の5グループが活動。
生涯学習センターがボランティア活動を養成し各施設に派遣している。
2001年度は153回実施。次年度、展示説明員養成講座を実施する。
公民館の古文書講座をもとに作られた「日野の古文書を読む会」の中のハイレベル集団、同会研究部会の方々に週1～2回、当館内で資料整理や文書解読・積分打ち込み・意識などの展示補助作業を行ってもらっている。今のところ、公募のボランティア受付はやっておらず、「日野の古文書を読む会研究部会」「日野の昭和史を綴る会」「歴史と民族の会」など、既成の会に博物館業務を手伝ってもらい（こちらが会場・資料提供するという形）、やがてボランティアへという形を考えている。
小学生民具案内は、当初、教育委員会の体験学習として、「くにたちの暮らしを記録する会」のメンバーにより始められたが、1995年より当館に移行し、実費程度を支出している。内容は体験指導ボランティア。
全く違う2種類がある。ただし、日常の館の業務をサポートしてくれるものではなく、特定の事業についてのみの活動。特に雑木林は、自主グループに近い状態。
1997年に活動成果の発表の場として「多摩の植物展」を開催。現在は、植物標本目録の刊行、インターネットでの公開を目指して活動中。
1996年度より導入。火曜から金曜の曜日ごとに班を編成し活動している。
ボランティアとの協働による資料館の事業運営に向け、2003年度からしくみづくりの検討を始める予定である。想定しているボランティアの内訳は、常設展示解説・歴史散歩コース・小中学生見学体験補助・ホームページ作成更新・体験教室見学会補助・資料整理企画展示補助などである。

2002年度活動報告

町田市立博物館

町田市立博物館では、2002年度に次のような展覧会を行いました。

■写された国宝—日本における文化財写真の系譜—

(4月16日～5月26日) 長年にわたって多くの写真家が撮影し、残してきた我が国の文化財の写真は、記録として重要であるばかりでなく、文化財の制定にも大きな役割を果たすとともに、人々の文化財への関心と理解を深めました。写された国宝や重要文化財の歴史をたどり、それぞれの時代の写真家(横山松三郎、工藤利三郎、土門拳、入江泰吉など)が、どのような視点で文化財をとらえ、表現してきたかを検証しました。

■中国ガラス—清朝から現代までの玻璃の彩り—

(6月18日～7月28日) ガラスは透き通っているイメージがありますが、清朝にはいつてからの中国ガラスの多くは、不透明ガラスで作られていてガラスの感じがしません。ヨーロッパの技術指導を受けている初期(17C末～18C初)には透明ガラスでしたが、まもなく不透明ガラスに変わっていきます。その理由は、中国では古来より玉が大切に扱われてきたからです。玉の持つ意味合いは時代によって変わってきますが、権力の象徴、宗教的な小物、置物、装飾具などさまざまな形で使われてきました。従って中国は玉の文化でもあり、ガラスは玉のイミテーションとしての意味合いが強いため、不透明の必要があったのです。

■挿絵画家伊藤彦造の画業ルソンの籠と壺—飯島コレクション—

(8月6日～9月1日) 昭和16年以来市内玉川学園在住の伊藤彦造氏は、大正時代末から昭和40年代にかけ活躍した細密ペン画による時代小説の挿絵画家として知られます。本展では氏の画業をデビューから戦後にいたるまでの代表作約50点を紹介しました。飯島正一氏が収集された古壺と籠の中から、フィリピンにまつわる作品を中心に紹介しました。飯島氏は、茶室の作庭を手がけられた際に、茶の空間に関心を持ったことがきっかけとなって、古壺や籠の収集を始められました。そして、茶室に飾られる茶壺や籠に近い、魅力的な作品がフィリピンに伝えられていることを知り、彼の地を訪れるたびに少しずつ収集されたということです。この現象は偶然ではなく、千利休の時代に日本とフィリピンは南海交易を介して一種の文化交流を行っており、その足跡が日本の茶道と現代のフィリピンに残っています。

■日本陶磁五千年の至宝—愛知県陶磁資料館コレクション—

(9月10日～10月20日) 愛知県陶磁資料館は愛知県瀬戸市に位置し、愛知県が誇る陶磁史研究セン

ターとなっています。そこに集められた作品資料の中から重文を含む120点によつて日本陶磁の黎明から現代まで5千年の歴史を展観しました。縄文土器から、中世六古窯、安土桃山時代の志野や織部、江戸時代では肥前の柿右衛門や京焼の仁清など、その時代を代表する作品をそろえました。また、近・現代の新しい動きの中で活躍した作家たち、石黒宗磨や荒川豊蔵、加藤唐九郎、坂本快示、加守田章二などから、全体像を概観できる多彩な作品を選んで展示しました。

■カットガラスのきらめき—西洋から日本へ—

(10月29日～12月1日) カットガラスとは、カット文様を入れたガラスを意味する場合と、器形を整えるためにカットしたガラスを言う場合があります。本展ではカット文様の施されたガラスに視点を当て、カットガラスの歴史の変遷をたどりました。カットには直線や曲線などの線彫り文様、彫琢による浮彫り文様、円形、楕円形、亀甲文などを凹凸状に彫った文様などがあります。線彫りカットや凹面カットは光を乱反射させ、ガラスを美しく見せる効果があります。浮彫りや凸面カットは、文様を強調するための有効な技法と言えます。カットは今日に至るまでガラスの大切な装飾方法の一つとして受け継がれてきました。



■型紙摺絵のいろいろー館蔵岩崎コレクション染付磁器よりー (12月10日～2003年2月2日) 当館には1987年に岩崎安吉氏にご寄贈いただいた1300点の印判手磁器があります。印判手とは、明治から大正時代にかけて量産された染付磁器のことです。白磁に呉須で青い文様を描く染付は、江戸時代まで、手書きに頼っていましたが、明治時代に入ると量産のための技法が考案されました。一つは伝統的な染付技法を応用した型紙摺絵、もう一つはヨーロッパからの技法を導入した銅版転写です。前者は文様を切り抜いた型紙を当てて呉須を塗り、文様をすりつけていく技法、後者は銅版画を応用したものです。今回は銅版転写より早く始まったとされる型紙摺絵によるものを展示しました。

■町田・民俗の世界からー民具と暮らしー

(2003年2月11日～3月16日) 人口39万人余を数える町田市域も昭和30年代半ば頃までは、南関東のごく普通の農村としての景観と伝統的生活様式を残す地でした。この展示では、江戸時代末から昭和30年代にかけての町田に暮らした人々の生活の様子を民俗・民具から概観しました。

活版印刷技術の展示

青梅市郷土博物館

現代社会では、技術革新が目覚しく、効率化は追求され続け、人の手と技とに頼らなければならない産業技術はそのほとんどが急速に駆逐される傾向にあります。このような時代の趨勢をまともに受けている諸産業の中で、近・現代の出版・印刷文化を支えてきた、金属活字による活版印刷技術もその典型的なものといえます。

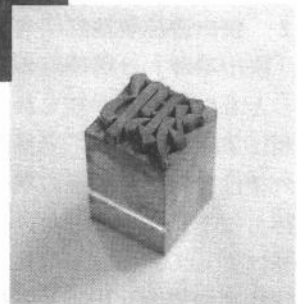
青梅市内にも、数件の印刷工場が有り、かつては活版技術による印刷でしたが、写真植字によるオフセット印刷の普及や、電算入力による製版が、金属活字の活版印刷から取って代わってきました。

この中であって、市内根ヶ布にその基盤を置く株式会社精興社は、活版印刷を手がけた会社の中でも、保有活字数と種類では国内一を誇り、加えて自社独自の活字(精興社書体)をもって、平成7年まで稼働してきました。根ヶ布本社敷地には、活字鑄造機、紙型製造ユニットがこの業種特有の工場棟に残り、紙型倉庫等、活版印刷工場特有の景観を見る事ができます。しかし、一度寸断した技術は、様式的なマニュアル化をできる部分はあっても大部分が直接携わった人々の工夫、技の伝承に頼るところが大きいため、忘れ去られ、再現が不可能となるばかりでなく、その様な人を育てる教育的背景も理解が困難になってしまう事から、こ

の種の機器類や技術の保存は、産業史の上で重要な課題となっています。

教育委員会ではこれまでも、市内で発達した産業や工芸について、伝統工芸技術の調査を実施しておりますが、この「活版印刷技術」を重要な近・現代産業遺産の一つとして認識し、平成9年度から3か年計画で調査を実施し、青梅市文化財総合調査報告「活版印刷技術調査報告書」を公刊する事ができました。

さらに、これを受け「活版印刷技術展」(仮称)を青梅市郷土博物館で行なっています。展示品は、活字のもとになる、原字、垂鉛版パターン、母型などや活字、活字鑄造機、スグレケース。原稿を見ながら、活字を拾う文選作業。文選から文字間、行間などを整える組版、植字作業。そして、印刷作業の様子などを実物資料や写真など取り入れて活版印刷作業の様子をわかりやすく展示します。期間は、平成15年2月18日(火)から平成15年5月中旬までです。皆様のご来館をお待ちしております。



創立記念シンポジウム・狭山遺跡・里山

瑞穂町郷土資料館

1 創立25周年記念シンポジウム

瑞穂町郷土資料館は昭和52年(1977年)に開館し、今年で創立25周年を迎えました。これを期して、瑞穂町教育委員会の主催において7月6日(土)に記念シンポジウム「これからの郷土・文化・科学技術」を瑞穂町スカイホール会議室で開催しました。創価大学・山本忠行氏の基調講演、東京理科大学・小島尚人氏の基調報告を中心に瑞穂町の歴史を踏まえた、新世紀への展望を話し合いました。

瑞穂町は1970年代初頭から、狭山丘陵を中心として、縄文時代草創期から中期に至る遺跡において相当数の出土品が確認されてきました。歴史的には、延長5年(927年)の「延喜式神名帳」に、現在の殿ヶ谷地区の阿豆佐味天神社が武蔵国多磨郡八座の一つとして記載されて以降、承久2年(1220年)には「八雲御抄」に現在の狭山池が「宮の池」として掲出され、また正安2年(1300年)には瑞穂町最古の板碑が建立されています。

中世には「村山郷」として知られ、村山土佐守等の諸活動が造寺等において確認されています。近世に入ると、享保の改革の一環として新田開発が奨励され、享保10年(1725年)からは下師岡新田・長谷部新田・栗原新田・殿ヶ谷新田等が相次いで開発の緒につき、日光街道・青梅街道の整備と相俟って、現在の箱根ヶ崎地区等は宿場としても栄えるようになりました。「箱根そば」「ジュンサイ料理」「狭山茶」等が近隣に知られるに至りました。近代の黎明は慶応元年(1865年)に現在では「調練橋」の橋名を残す狭山池において近在の人々を集めて砲術訓練が行われることに始まりました。明治から大正・昭和にかけては、養蚕・狭山茶・村山大島紬等の地場産業が成立し、近年は狭山丘陵を中心とした自然の保全と平坦地を中心とした産業振興の調和のとれた町づくりを進めてきました。

創立25周年という節目は、資料館のこれまでの歩みを振り返り、これからの郷土文化のよりよい発展をめざしてともにその道筋を考えるよい機会となりました。

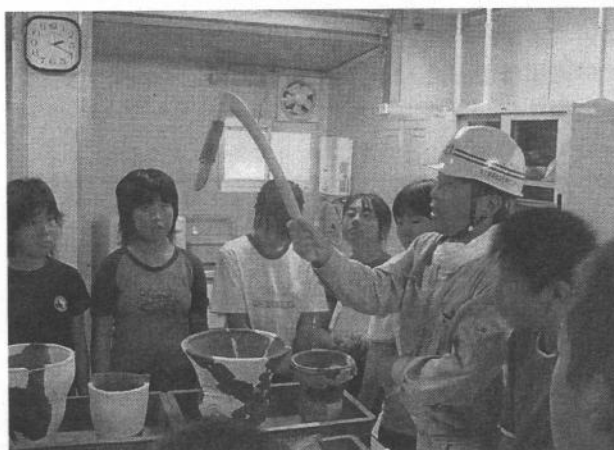
2 狭山遺跡現地説明会

「狭山遺跡」は瑞穂町の諸遺跡の中で、「六道山遺跡」とともに最もよく知られた遺跡であり、昭和40年代初頭に東京都によって発掘調査が行なわれましたが、その後は本格的な調査の機会がなく新たな本格的調査が待ち望まれていました。平成13年度の東京都の試掘調査によって、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代等の遺物が出土し、複合遺跡としてその重要性が

あらためて確認され、今年度の本調査開始時点で、旧石器時代・縄文時代等の遺物および灌漑用水に用いられた溝等の重要な遺構が確認されることとなりました。

瑞穂町教育委員会では、本遺跡の重要性を改めて認識し、瑞穂町の歴史の黎明を町民等に周知することを考え、東京都埋蔵文化財センターに、発掘調査の現地説明会開催の要請を行い、文化財センターの多くの職員の方々の御協力をいただき、9月9日(月)に町立学校児童生徒を対象として、また9月14日(土)に町民一般等を対象として、「狭山遺跡現地説明会」を実施しました。

本説明会は、瑞穂町の歴史および狭山池・残堀川の成立等の状況を町立学校児童生徒ならびに町民一般の方々に周知し、その歴史および環境保全等の認識に多く寄与することができたものと思われま



3 企画展「狭山丘陵の考古と自然」

6月15日(土)～8月31日(土)

瑞穂町の遺跡調査は、昭和43年(1968年)8月に始まった瑞穂町史編纂の一環として、「狭山遺跡」「六道山遺跡」「浅間谷遺跡」の3遺跡について、昭和43年(1968年)12月、44年(1969年)3月・12月の三次にわたって行われました。これが瑞穂町における本格的な遺跡調査の始まりとなりました。それ以前の遺跡調査は、町の有志の方々が個々に遺跡地域の周辺の表土を調べて、表面採取することが中心でした。

これらの個人的な採取は今となっては大変貴重なものとなっています。昭和30年代から昭和40年代にかけてのこれらの遺物の主要なものを瑞穂町の発掘前史として展示しました。

瑞穂町の遺跡は、現在22箇所が確認されています。時代的には、旧石器時代末期の出土品が確認されている「松原遺跡」に始まり、「狭山遺跡」「浅間谷遺跡」「六道山遺跡」などで、これらの遺跡では主に縄文時代早期から中期に至る遺物が確認されています。瑞穂町の遺跡出土品は、時代的な状況により、石器の出土

が多く、これに比して、土器類の出土は少なくなっています。

狭山丘陵とその周辺は現在、東京都に残る貴重な自然遺産として認識されるようになりましたが、この展示によって、その考古学的な時代確認がなされ、狭山丘陵のより総合的な認識が深まることをめざしました。

4 秋季企画展「狭山における近世・近代の産業と芸術」11月15日(金)～12月15日(日)

明治維新に始まる日本の近代の諸改革に伴い、廃藩置県・府県制等の実施が相次ぎ、次第に近代的な地方行政組織が整ってきました。特に新たな府県制の実施は、近世までの地域文化・地域産業等に大きな影響を及ぼしました。それまで日常的に交流・交易がなされていたところに新たな行政的な区画割がなされることによって、文化と産業の諸方面に従来の自然地形等を越えた展開がなされるようになりました。

瑞穂町は、江戸時代の享保の改革による長谷部新田・栗原新田・殿ヶ谷新田等の新田開発によって、現在の町域の主要な部分が形成されました。明治時代の当初、西多摩郡の各村は神奈川県に属し、その後明治26年(1893年)に至り東京府へと編入されました。その後昭和15年(1940年)に、箱根ヶ崎村・石畑村・殿ヶ谷村・長岡村を廃して町制を施行し、西多摩郡瑞穂町となりました。昭和33年(1958年)に埼玉県入間郡元狭山村の一部を合併し現在に至っています。

こうした時代的な変遷を伴いながらも、私たちの日常生活は近世以来の地域交流による多くの蓄積と成果を現代に活かし続けてきました。

秋季企画展では、一般に「狭山」と呼称される地域に生まれ成長した産業と文化について、従来の調査等を整理し、関連した資料とともに展覧しました。産業のうちでは特に製茶と養蚕・染織に焦点をあて、文化については町域に現存する建築と、それに付加された美術的な要素である彫刻や天井画等を中心に、地域文化を紹介しました。

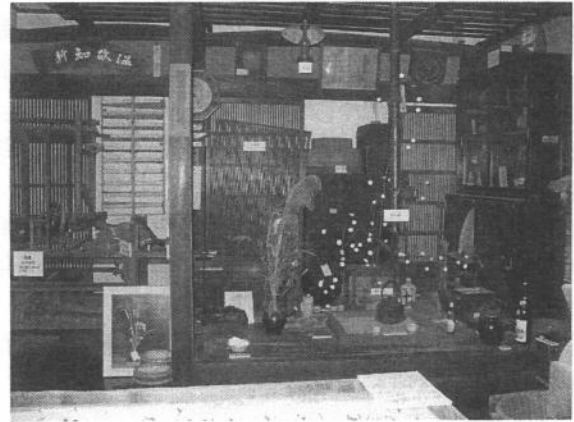
5 常設展「囲炉裏端・台所・里山の仕事」

狭山丘陵の裾野は近世中期以降、約300年にわたって、いわゆる里山として、周辺の人々との間に共生的な関係を保持し、丘陵がもたらす落ち葉等の自然資源は安定した農業経営に欠かせないものでした。

里山は、歴史的経過の中で、農業を中心としたものではありましたが、生産と消費の循環を一体としてとらえる循環型社会のありかたを提示し、人間と動植物と自然とが互いに他を犠牲にすることなく良好な関係で継続的に生起する共生的な関係を具現してきたことが近年広く認められつつあります。里山は、山すそそこに広がる雑木林、谷戸の小さな田んぼや屋敷林に囲まれた農家とその周囲の畑地などを含み、人と動植物や、落ち葉や枯れ枝までがともに支え合いともに補

い合いながら、安定して持続した構成体を創り出すために多大な労力を必要とする人工的な営みでした。

この里山の仕事と農家の囲炉裏を結ぶ一連の状況を、復元することが、本資料館の常設展の総合的な主題とし、調査研究を進めながら展示に反映してきました。本年度においては、農具と養蚕用具を中心的な課題として取り組みました。



入館者 100 万人達成

奥多摩水と緑のふれあい館

奥多摩 水と緑のふれあい館は、東京近代水道100周年及び小河内貯水池竣工40周年の記念事業として、東京都水道局と奥多摩町の共同で旧奥多摩郷土資料館跡地に建設し、平成10年11月27日に開館しました。奥多摩の豊かな自然・水の大切さ・水源林の機能・貯水池(ダム)の仕組みや役割・水源から家庭の蛇口に至る過程をわかりやすく各ゾーンとも映像で紹介しています。また、水源地である奥多摩町の歴史・文化・郷土芸能・地場産業等の紹介展示を行なっています。

水源地である奥多摩町を知っていただき、東京の水源地をより身近に感じられ、水と自然と人の調和の大切さを知り、水道を利用する都市住民とのふれあいの場をつくるための事業運営を行なっています。

100万人目の来館者を平成14年8月24日に開館以来約3年9か月の早期に迎えることができました。今年度は「来館者100万人達成」の記念イベントを実施しました。

■ 5月18日(土)・19日(日) (午前・午後各1回) 春の奥多摩ミニコンサート マリンバ演奏(都民交響楽団員)

■ 7月1日(月)～7月30日(火) 100万人達成日当てクイズ(応募総数1,662人 正解者108人 抽選により正解者30名にオリジナルオレンジカード進呈)

■ 7月20日(土)～9月30日(月) わくわく水の探検

スタンプラリー (対象施設:水の科学館・水道歴史館・奥多摩水と緑のふれあい館)

■ 8月24日 (土) 100万人達成記念式典 (100万人の方へ記念品贈呈・くす玉割・100万人達成日当てクイズ当選者抽選)

■ 9月15日 (日) 奥多摩水源地郷土芸能フェスティバル (国指定重要無形民俗文化財 鹿島踊り、都指定無形民俗文化財 坂本・川野・原の各獅子舞)

■ 9月15日 (日) ~10月15日 (火) 水道週間入賞作品展 (6月1日~7日の水道週間の応募作品で入賞作品展示)

■ 9月19日 (木) ~11月21日 (木) ダム写真展 (小河内ダム関連・関東のダム関連)

■ 11月23日 (土)・24日 (日) (午前・午後各1回) 100万人達成記念 秋のミニコンサート (都民交響楽団有志、クラリネット五重奏・木管五重奏)

平成15年度は、開館5周年の記念の年にあたるため、記念イベントを計画しています。

平成14年度事業を振り返って

武蔵村山市立歴史民俗資料館

武蔵村山市立歴史民俗資料館では、平成14年度事業として以下の各事業を実施しました。特に今年度は、学校週5日制の導入や総合的な学習の時間の本格実施に対応するため、学習支援講座メニューを開設するとともに、里山体験施設を活用した新たな体験型の事業展開に力を入れました。



昭和40年頃の三本榎 (左は乙幡榎、右は加藤榎)

◎展示事業

■写真展「ちっとんべえ昔の武蔵村山 - 三本榎・五郎松を中心に -」(平成14年7月19日~8月31日、市役所1階ロビーで9月6日~20日に巡回展)

武蔵村山市の文化財にも指定されている「三本榎(乙幡榎・加藤榎・奥住榎)」を中心に、当館所蔵及び市内外の方々から提供いただいた多くの写真をもとに、古くから人々に親しまれてきた巨木をテーマにした写真

展を開催しました。

■企画展「カマドのある風景 - 野山北公園内遺跡群の古墳時代集落 -」(平成14年11月12日~12月25日)

昭和63年から平成2年にかけて野山北公園内で行った発掘調査の成果を踏まえ、各遺跡から出土した遺物を展示するとともに、カマド遺構にスポットをあてながら古墳時代集落の様子について紹介しました。

■季節展「ひな人形・五月人形・七夕飾り・恵比寿講」など

◎講座・教室等事業

■歴史講座

1. 「『指田日記』から見た幕末の民俗」

(平成14年8月3日、教育センター集会室)

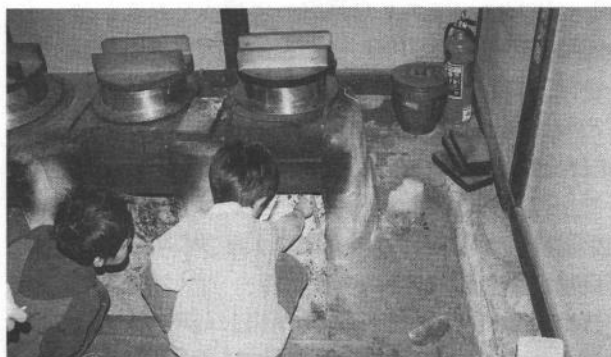
講師 水野紀一氏 (市文化財保護審議会委員)

2. 「天明の打ちこわし(武州村山騒動について)」

(平成14年10月12日、教育センター集会室)

講師 寺町 勲氏 (市文化財保護審議会委員)

■学校週5日制対応事業(体験教室)「カマドで御飯炊き(全4回)」(平成14年5月25日、6月22日、9月28日、11月16日、里山体験施設)



うまく炊けるかな?

■体験教室

1. 「しめ飾りづくり」

(平成14年12月14日、里山体験施設)

講師 小川栄子氏 (東京農工大繊維博物館サークル会員)

2. 「トッチャアナゲ(すいとん)づくり」

(平成15年2月22日、里山体験施設)

講師 原田千代子氏 (市内岸地区在住)

■自然教室「自然と遊ぼう」(平成15年3月15日、野山北・六道山公園) 講師 石橋正行氏 (都立神代高校教諭)、久永英二氏 (都立北多摩高校教諭)

■東京都野山北・六道山公園管理所との共催事業

1. 里山郷土食体験「手打ちうどんづくり」

(平成14年10月5日、里山体験施設)

2. 里山生活体験「椎茸のホダ木づくり」

(平成15年3月8日、里山体験施設)

■文化財見学会「村山大島紬の歴史を訪ねて」

(平成14年11月2日、村山織物協同組合事務所ほか)

講師 榎本光好氏 (元市文化財保護審議会会長)

檜原村の特産であった数馬の砥石

檜原村郷土資料館

武蔵名勝図会(文政3年)巻10 小宮領之下の項に檜原村の産物として、三頭山・数馬山より出る砥石が載っている。以前から数馬地区で砥石が出るとは聞いていた。また三頭山周辺に砥石山(1302m、図会にある数馬山と思われる)と呼ばれる山があり、その山の奥多摩町側に砥石沢という沢が流れている。檜原村史にも「数馬砥」として載っているが、過去のものとして余り話題にはならなかったと思われる。

東京都埋蔵文化財センターが、江戸の大名屋敷遺跡の発掘調査をした折に大量の砥石が出土し、その産地の調査を実施しているとのことで、当館に問合せがあった。さっそく調べてみた結果、数馬周辺には、今は使っていないが、農林業が生業だったため多くの家の庭先に砥石があるとの話を聞くことができた。また元鍛冶屋だった家にも、業務に使った砥石がある事が分り、この2つの砥石を採掘した場所は、以前は道があったが今は樹木が生い茂り、現地に行くのは困難であるとの説明を地元の長老から聞くこともできた。

そこで現地に詳しく、実際に石を掘りこれを使用し原石を持っている人が居ると聞き、さっそく調査協力を依頼したところ、快く引き受けていただいたので、後日埋蔵文化財センターの調査研究員の方に同行し、現地をおとずれ調査を実施した。採掘場所は2か所あり、いずれも今は道がなく現地へ行くのは困難なため、後日案内するとのことなので、大体の場所を聞いておいた。採掘は詳しくはわからないが、明治時代までは長野方面まで流通があったといわれ、生業にしていた人も居たのではないかと感じられた。昭和30年頃までは自家用に掘られていたが、その後は余り掘られなくなり、40年以降は掘る人もいなくなったとの説明を受けた。採掘した原石と道具を見せていただいたが、原石については調査のためセンターに寄贈していただく事となった。

次に、過去に使用していた砥石を1個、業務用のもの1個を、家をまわり、寄贈していただき、郷土資料館に保管した。原石は後日埋蔵文化財センターで鑑定の結果、流紋岩質の火成岩で良質なものであったと連絡を受けた。



檜原村周辺でも砥石が出た場所もあると聞いたが、古書に載っているのは、数馬の砥石のみ

で、江戸時代にはかなり出まわっていたのではないかと考えられる。大名屋敷跡調査出土の砥石も流紋岩質のものが多く聞き、かすかな期待もある。檜原村としても、今後文化財として、採掘場所の確認と歴史的事実を調査する必要があると思われる。

企画展「裸の大将 山下清遺作 東海道五十三次原画展」を開催

清瀬市郷土博物館

「裸の大将」「放浪の画家」「日本のゴッホ」など数々の呼び名があり、その作品やエピソードが多くの人たちに愛された作家・山下清画伯の遺作「東海道五十三次」を展示した企画展「裸の大将 山下清遺作 東海道五十三次原画展」を7月6日から21日まで開催しました。

この作品を描くにあたり昭和40年、山下画伯が43歳頃から始まった取材は、東京・皇居前広場を起点として、順番に各所を訪れては長時間眺めるといった数年がかりのゆっくりとしたものとなりました。家に戻りそのイメージを的確に描いていく作業にとりかかりましたが、42番目の名古屋の熱田神宮まで完成した時点で体調を崩し、制作を続けることができなくなってしまいました。2年間の静養後、「今年の花火見物はどこへ行こうかな」の言葉を最後に昭和46年に49歳で永眠し、作品は未完成のままと思われていましたが、没後間もなく自室の押し入れから残りの作品13点がご遺族の手によって発見されました。原画は完成していたのです。

今回は、この東海道五十三次のペン画46点、版画9点、日記などを一堂に展示しました。これらの作品群を所蔵する市内在住のコレクターより、作品を広く市民の皆さんに紹介したいとの意向を受けるとともに、山下家にご賛同・ご協力をいただき実現したものです。没後すぐに行われた展示会以来、約30年ぶりの作品公開ということもあり、画伯の晩年の知られざる業績にふれる良い機会を設けることができました。

さらに、会期中には展示にご協力くださったコレクターと画伯のご家族による記念講演会「山下清の本当の話」も開催し、画伯の素顔が浮き彫りにされました。

この展示、新聞やテレビで報道されたこともあり、猛暑の中、作品を一目見ようと関東各地や遠くは関西などからも大勢の人々が訪れ、会期中の入場者数は約7,700人にも上り、画伯への根強い人気を窺い知れると共に、同館を、さらに清瀬をたくさんの皆さんに知っていただける良い機会となりました。

最近の活動報告及び事業計画

小金井市文化財センター

○ **企画展：「石の道具－旧石器時代から縄文へ－」**
14年11月3日～15年2月16日 当センターでは市内遺跡から出土した多数の考古資料を保管しており、これまでも遺跡展等で紹介してまいりましたが、十分に活用が図られているとはいえません。そこで今回は、石器に焦点をあてた展示を試みました。この展示では、石器から見た旧石器時代から縄文時代への移り変わりや両時代の生活の違いを示すことをテーマとしました。展示の工夫としては、細かな年代にはこだわらず、約200点の石器を種類ごとに群として展示し、両時代の石器が多様な器種や石材で構成されていることを視覚的に示しました。石器だけの展示は初めての試みでしたが、来館者の感想は好評でした。また、この企画に関連し講演会を「石器と人々の暮らし」というテーマで実施しました。

○ **収蔵資料の整理・活用** 収蔵資料を展示や研究資料として活用するためには、まず資料が整理され、何時でも検索できる状態にしておくことが必要ですが、十分に整理されているとは言い難い現状です。そこで、緊急雇用創出事業を活用して収蔵資料の整理を行なっています。今年度は、縄文土器の完形品及び旧石器時代の石器のデジタル写真撮影とデータベース化（台帳作成）を実施しました。この事業の目的は、保管資料の全体を把握し、活用を図るための基礎資料とすることにあります。さらに、デジタル写真の活用方法としては、資料管理のためだけでなく電子ミュージアム等インターネットでの公開にも利用できます。博物館等では実物資料の展示が基本ですが、展示スペースの関係から常時展示できる資料には限りがあります。デジタル写真による公開は、研究面ばかりでなく、教育普及面でも有効な手段となり得ます。今後は、市のホームページ等での公開に向けて検討を進めていこうと考えています。

○ **来年度の展示計画** 4月の花見時期に実施する恒例の「名勝小金井桜」展では、江戸開府400年に因み、江戸文化と小金井桜をテーマとして、江戸時代に花見に訪れた文人達に焦点をあてた展示を予定しています。現地見学会も計画しており、名勝小金井桜の保護活動を続けている市民団体の参加や協力を得たいと考えています。秋の企画展では、開館10周年記念として、「青年団と浴恩館」（仮）を予定しています。内容は、青年団の歴史や、昭和5年から12年まで全国の青年団指導者講習所が置かれた当浴恩館での青年たちの活動、日本の青年団活動の中心的役割を果たした田沢義鋪や、

青年団講習所の所長を務めた下村湖人の業績と人物像等について紹介する予定です。

○ **古文書講座と自主グループの活動** 古文書講座は、地域に残る江戸時代の文書をテキストにして、古文書の読み方やその内容を読み解く初心者向けの講座で、平成11年度から始まりました。平成13年4月に受講者を中心に自主学习グループが発足し、当センターを拠点として、地域史料の解読作業を継続しています。将来は、市民参加による「小金井市史」づくりの担い手（市民協力員）になっていただくことを期待しながら支援をしています。今や行政と市民とが協働する市民参加の時代、展示解説員や文化財めぐりの講師等ボランティアの育成・活用の必要性は常に感じていますが、受け入れ体制が充分でないため、まだ導入できない状態です。当面は当センターを利用して活動する市民団体や学習グループの協力を得ながら、市民との協働を図っていきたくと考えています。



特別展示「虫めがねの世界」への取り組み

東京都高尾自然科学博物館

近年、総合的な学習の実践などから、益々博物館に対するニーズが増してきている。それに伴う仕事が増加していく反面、本来からの仕事への労力の配分も減らさざるを得なくなっている。こうした現状においては、いかに効率的な企画を生み出すかが、いやおうなしに重要なテーマとなってくる。また博物館の重要な主催事業の一つである特別展示については、企画展（通常、特別展と称されているものに相当する）と異なり予算が微少である。それ故、館内のやりくりに苦労するところとなり、職員のさまざまなアイデアを出し合い、その検討が必須課題となる。今回は、平成14年12月14日から当館で主催している特別展示「虫めがねの世界」における準備や開催の過程で試行錯誤したことをここに紹介する。

これまで当館は、計14回の特別展示を行ってきた。

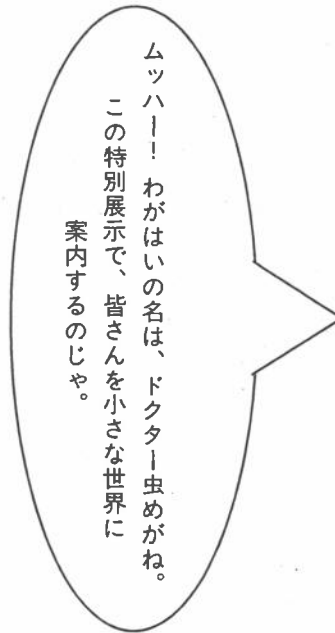
そのうち、写真の展示が6回、写真と標本の同時展示が3回と写真展的な要素に強く依存してきた。目的の物を撮影するまでの苦労は有るが、撮り貯めたストックの中からテーマに応じた内容の写真を必要数揃えることができれば、開催の目処が立つ。後はプリントして額にはめ込み展示をすれば良いので、展示に漕ぎ着けやすいのがメリットの一つである。当然、写真には、タイトルや解説、感想を付けることで、来館者にメッセージを発信していたのだが、ほとんどが一方通行的な感があったことは否めない。そういった事情から、今回は予算、労力を低く抑え、なおかつ参加型となるような写真展を目指した。また、同時にもう一つ目指したのは“楽しさ”である。小学生を始めとする児童たちに、自然の面白さを伝える為の大前提である。何を今さらと思われるかも知れないが、この基本を本当にマスターするのは、大変難しいと思う。

さて、前置きが長くなってしまったが、実際に行った事を紹介する。まず一つは、クイズの多用である。被写体(拡大写真)の正体を考えさせるのである。来館者に考えさせる為に、クイズにはヒントを設けた。いろいろな視点で考えていただくために、ヒントの出し方のバリエーションを増やすことが大事だと判断し、ヒント出しや解説を行うオリジナルキャラクター(設定は虫めがねの妖精)を6タイプ生み出した。各キャラクターの性格、セリフ、使用の目的と役割、使用上の注意など、細かい設定を行うことで、終始統一された効果的な使用が設定者以外にも可能となった。この事により、作業分担や共同作業が可能となり、非常勤の多い職員間での仕事の連携プレーが実現した。キャラクターは、基本的にはパソコン上で作成し(今回は原画のみ手書き)、好きなように加工できる。吹き出しや背景なども、慣れれば簡単に文章ファイル等で作成可能である。つまり通常のパソコン、スキャナー、プリンターさえあれば、誰にでもできる作業である。作成したクイズ・ヒント(A4サイズ)は2枚もしくは3枚重ねにして写真の下にぶら下げ、取り付けた取っ手を持ち上げることにより解答を見られるようにしてある。耐久性を持たせるために、これらは全てラミネート加工した。被写体となったいくつかの昆虫や虫こぶの実物も併せて展示し、台付きの虫メガネを通してのぞくことが出来るようにした。中には生きた昆虫を入れたり、のぞく方向を通常とは異なるようにすることで変化を付ける工夫も試みた。

これまで約1ヶ月の開催におけるアンケートの結果、面白さや楽しさ、展示の説明の工夫に対するの評価をコメント覧にいただいている。この原稿だけでは、実際の展示の様子をご理解いただくのは大変難しいと思われる。興味のある方は実際に来館いただくか、問い

合わせをしていただきたい。

キャラクターサンプル 例



キャラクター名：ドクター虫めがね

性格

- ◆ボケとツッコミの両方をこなすが、主としてツッコミ役。
- ◆多少、マッドサイエンティストな趣も有する。
- ◆根はまじめで、知的な笑いをとることに、生き甲斐を感じている。

役割・行動

- ◆来館者にいろんな視点で物事を考えさせるための、誘導員。
- ◆自分でわざとボケをかました後に、本質的な鋭い意見をポロッと、ヒントにとしてコメントする。

口調の例

「〇〇なのじゃ。」「〇〇じゃわい。」
挨拶「ムッハー！」 怒り「ムカー！」
笑い方：「ムハハハハハ！」 驚き：「ムハッ！」

注意事項

あくまでも作品やセリフの方が目立つように使用。

東京都三多摩公立博物館協議会会員名簿

館名	住所	電話	交通
東村山ふるさと歴史館	東村山市諏訪町1-6-3	042-396-3800	西武新宿・国分寺線「東村山駅」西口下車徒歩10分
八王子市郷土資料館	八王子市上野町33	0426-22-8939	京王線「京王八王子駅」またはJR中央線「八王子駅」からバス「市民会館」下車
府中市郷土の森博物館	府中市南町6-32	042-368-7921	京王線・JR南武線「分倍河原駅」から健康センター行きバス「郷土の森」下車
町田市立博物館	町田市本町田3562	042-726-1531	小田急線・JR横浜線「町田駅」から藤野台団地行きバス「市立博物館前」下車
青梅市郷土博物館	青梅市駒木町1-684	0428-23-6859	JR青梅線「青梅駅」下車徒歩12分
調布市郷土博物館	調布市小島町3-26-2	0424-81-7656	京王相模原線「京王多摩川駅」下車徒歩5分
瑞穂町郷土資料館	西多摩郡瑞穂町石畑1962	042-557-5614	JR八高線「箱根ヶ崎駅」下車徒歩18分
奥多摩水と緑のふれあい館	西多摩郡奥多摩町原5	0428-86-2731	JR青梅線「奥多摩駅」から小河内方面行きバス「奥多摩湖」下車
福生市郷土資料室	福生市熊川850-1	042-530-1120	JR青梅線「牛浜駅」東口下車徒歩7分
武蔵村山市立歴史民俗資料館	武蔵村山市本町5-21-1	042-560-6620	多摩モノレール「上北台駅」から武蔵村山市内循環バス三ツ木地区会館行き「横田」下車徒歩10分
あきる野市五日市郷土館	あきる野市五日市920	042-596-4069	JR五日市線「武蔵五日市駅」下車徒歩17分
羽村市郷土博物館	羽村市羽741	042-558-2561	JR青梅線「羽村駅」下車徒歩20分
清瀬市郷土博物館	清瀬市上清戸2-6-41	0424-93-8585	西武池袋線「清瀬駅」北口下車徒歩10分
立川市歴史民俗資料館	立川市富士見町3-12-34	042-525-0860	JR中央線「立川駅」南口から立川駅北口行きバス「農業試験場前」下車徒歩5分
檜原村郷土資料館	西多摩郡檜原村3221	042-598-0880	JR五日市線「武蔵五日市駅」から小岩行きか藤倉行きバス「資料館前」下車
日野市ふるさと博物館	日野市神明4-16-1	042-583-5100	JR中央線「日野駅」下車徒歩12分
小金井市文化財センター	小金井市緑町3-2-37	042-383-1198	JR中央線「武蔵小金井駅」下車徒歩25分、「東小金井駅」下車徒歩20分
くにたち郷土文化館	国立市谷保6231	042-576-0211	JR南武線「矢川駅」下車徒歩8分
東大和市立郷土博物館	東大和市奈良橋1-260-2	042-567-4800	西武拝島線「東大和市駅」から長円寺行きバス「八幡神社」下車徒歩2分
パルテノン多摩歴史ミュージアム	多摩市落合2-35	042-375-1414	京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車徒歩5分
東京農工大学工学部附属繊維博物館	小金井市中町2-24-16	042-388-7163	JR中央線「東小金井駅」南口下車徒歩9分
東京都高尾自然科学博物館	八王子市高尾町2436	0426-61-0305	京王高尾線「高尾山口駅」下車徒歩4分
江戸東京たてもの園	小金井市桜町3-7-1	042-388-3300	JR中央線「武蔵小金井駅」北口からバス7分「小金井公園西口」下車
たましん歴史・美術館	国立市中1-9-52	042-574-1360	JR中央線「国立駅」南口前
御岳美術館	青梅市御岳本町1-1	0428-78-8814	JR青梅線「御嶽駅」下車徒歩20分

ミュージアム多摩 No.24

編集委員：多田亨(町田市立博物館)・小林央(八王子市郷土資料館)・小野一之(府中市郷土の森博物館)
・小林弘(青梅市郷土博物館)

発行：東京都三多摩公立博物館協議会
(会長 東大和市立郷土博物館 / 〒207-0031 東大和市奈良橋1-260-2 電話 042-567-4800)

発行日：2003年3月31日